

方 向

十五

		*		
	原	田	島	雄
関	西		で	1
仁	科	白	谷	15

		*		
	原	田	慶	
詩	8		篇	58
	弄る	58	川	60
	サルビヤ			62
	馬	64	武器	65
	男	67	少女	
	68	チューリップ		71

		*		
	原	田	憲	雄
王	維	詩	鈔	72
裴	迪	詩	鈔	90
歷	代	詩	鈔	96
袁	中 郎	葉	雜 記	101

*

関

西

で

原

田

角

雄

改札口をでて、見上げた京都の空は、ひどく暗く寒かった。その空に、巨大な円柱が直立して
いた。円柱は、なにもにも属さず、孤独にただ存在しているかにみえた。それは人間に奉仕す
る構造物ではなく、同時に、人間を威圧する滑稽さすらももっていないと私にはうつった。いつ
ば、中空にほうりあげられてとまどっているデクノボウであった。これが、キョウトタワーだ
と知った。キョウトタワーは、いわば、資本者の陰莖である。くだらぬ男ほど、おのれの陰莖の
巨大さと、その勃起力を誇示したがるものであるが、そのように、資本者は、おのれの資本力を、
陰莖に形をかりて、誇示しているのかも知れない。キョウトタワーは、暗い空に、白痴的な明る
さをたもちながら、うつろに勃起していた。

石油バーナーの低い音をたてているストーブのかたわらで、神経学と神経病理学の雑誌をよん
でいると、自分が光明園へ赴社したのではないような錯覚におそわれた。川端通を時計口しる自
動車の音も、電話がなりそれに応答している事務員の声も、十々年の間、その中で暮らしてきた私
にとっては、異物感がなかつた。京都大学のらいの研究室で、これから口じめる検診の対象の二
三の人々の経過をメモする為にやってきたのだが、雑誌をよみはじめると、それすらも、忘れそ
うになつた。読みたい本をかう予算のない療養所。そして、たとい本があつても読む時間のない

療養所というものを、私はひどく冷たい気持ちでふりかえらざるをえなかつた。光明園に赴任して三ヶ月半たった今、ひどくあきらめのいい自分になつてゐるのに氣付いた。本を買つてもらうことは、すでにあきらめてゐる。心の中であたためていた実験も、多喜研究所の人々や、大学の連中へ、とくにだしめかれてしまつてゐた。アメリカの、この神経病理学の多くの論文は、数年前から明るい予見と、その臨床面への導入について、心ひそかに考文めいてきた私の推測を、見事に実証してゐるではないか。そのアイデアは、私も抱きつづけて来たものだ。完成された他人の論文の前でつぶやいてみたところで、所詮は、ひかれものの小唄でしかない。らいについてあまりにも知らなければならぬものが多すぎるのに対して、知りうることの少さを、私たるは、いつまで嘆かねばならぬのだろうか。らいについて、ひとつの目標をたてるために、日本では、今やひどく單純な断定的な意見がはびこりだしてゐる。らいについて、世界のらい病学は、一体何ほどのことを知つてゐるのだろうか。人間について、らい菌について、あまりにも複雑な推測をかさね、想念の森の小路で迷つてきた私にとって、二河白道ともいふべき一すじの道は、たしかに魅力的ではある。ましてや、療養所の中で、らいが治つたとも治らなかつたともつかぬままに、前途があるともないともつかぬままに、日々に治療をうけてゐる人々にとって、或はそれは輝かしい道でもあろう。だが、單純で泥にまみれぬ論議は、論議そのものは明るくとも、何ほどの力があろうか。らい病学という、この複雑な等問を、私は生きた患者そのものを教科書としてつつましくみつめようとしてきた。ともすれば、とびたつてけこうとする私の想念は眼前の事実の前に、つねに地上にひきもとされた。私の失敗そのものは、とびたつ想念にブレイキをかけた。

このようにして私は、刈り取るものは乏しく、とびたつ力も弱くはなつた。だが、刈りとつたものは、私自身の糧であつた。きらめきとびたつ華麗な論議も、私の刈りとつたものの前では、もはや光をうしなつた。終着駅を設定して強引にそこへひっぱって行かれた実験や、事実にみちびかれなかつた考察に、一体なにほどの救いがある。多くの論議はありはする。だが、らいを治し、らいをのりこえる者は、らいを病むひとりの人以外にありはしない。論議に花を咲かせても、ひとりのらいは治りはしないのだ。おのれのらいを治した日に、らいは治るといふ人を、今はただ信するだけなのだ。二十代と三十代の十五年を、らいとともにすごしてきた私は、いつしか四十才に近づいてきた。あきらめることゝなつた。なげやりにならなかつた。私には、ひとりの地点から他の地点へと、細渡りをしなかつた。ということかも知れない。ただひとすじの道しかないのではなく、多くの小路をさまよひながら、それをたのしんでいるのかも知れない。細渡りは、ライトをあげ、観衆の拍手の中でとりおこなわれている。しかし、細の上には花は咲かぬ。蓮花の傘をまわしたとて、それはひとときの仮のものにすぎぬ。雑草すら生えぬ細を、私が見上げる気にはならない。小道を見つめてゆき、そこに咲く花を心にとどめ、雑草を丹念にぬく方が、泥にまみれていようとも、結局は私になつた方法といえよう。らいの跡床の片すみで、わすかの人々をみつめながら、ひそひそあつめた小さい前見を、ささやかな論文にまとめても、らい病學では新発見となつた。それほど未知なる世界のらいについて、いつから、誰が、今日のような独断を許すようになったのだらうか。らいは治ると叫ぶことより、らいを治してしまふ方が、垂く冷たい事実とならう。かけ声が、事実より先走らぬ方がよい。

雪の伴吹山にむかつて、車は走りつづけていた。車の向う彼方にはあのおじいさんが待っていてくれよう。そして、軽快退所した彼もまた、その日一日の仕事を休んで、私をまわっていてくれるにちがいない。悲しみと、うたがいと、警戒のまなざしでむかえられていた頃とちがって、狂宅の人々は、今はすすんで私を迎えてくれるのだ。昨年、富山県で書いたのだが、こんな話がある。検診の時期が近づきつつあるのに、県庁から何の連絡もない。一体、医者はみに来てくれるのだらうかと、何日か思いつづけた末、県庁へいつごろ医者かみに来てくれるのだと手紙を出した。その手紙を出した直後に、県庁から検診の通知が来た。あわてて、郵便局へ行き、自分の手紙をとりもどしたというのだ。検診を、このように待ちわびてくれる人々がいるということも、私は誇ってもよいと思う。私を待ってくれる人がいることは、私をこの上もなくはげましてくれる。ういについて、私は何も叫んではいない。ただ、ういの人があればその人の傍にけき、なくさめ、はげまし、治療の方法を教え、その人の苦しみをきき、その人をとりまく偏見からその人を守ろうとしているだけなのだ。世間にもわかつて何もいわない、ういを病む人の側に立って、むしろ姑息ともいえる立場でその人と共に考えてきたにすぎない。そして、私をその人々が待っていてくれるのだ。ここには、悲観も楽観もなく、一般論も抽象論もない。平均もパーセントもない。ひとりの人に対して、与えうるすべてを与えなければならぬのだ。与えうるものは、わすかの言葉、わすかの薬であるうとも、待たれる愛にむくわねばならぬ。一年にただ一度、このように訪れる私の、このひそかなよるこびを、怒罵する人たちは恐らく知ることもないだろう。治療とは、平均的にでもなく、パーセントからでもなく、抽象的にでもなく、

孤独なたたかいののちに、ひそかに内的におとすれるものである。個体をインディビデュムと外国語ではいうが、その語は「分つべからざるもの」という意味がある。ひとりの個体におとすれる治療は、このように具体的で、かつ不可分のものである。おのれの狭い見聞を、なぜ人々は、ひとりの個体にもおしつけるのか。わかち得るものは、愛だけではなかつたのか。ういに、ついて、おのれの考えをおしつけ、自己をおしだし、ついには自己に憑かれてしまつてはなるまい。自分自身にとりつかれた類、前面に主張をつきだしたようなしきつた類の持主にはなるまい。

雨の夕暮れにも、軽快退所した人びとが、診察室に来てくれた。その人々の近況をきき、光明園の人びとのこと、建物のことなどつたえてみると、私にはこんなことが思われてきた。らいを治すということは、なるほど、ひとりの人にとつて、孤独な戦いである。しかし、それを支えるものは、やはり、愛である。さりげなく、自分の過去と現在とを語るこれらの人々の言葉のうらに、あきらかに、その人の治療を、その人と同じだけ待ちのそむ者がいたことがわかる。そしてひとりの人に私は言った。「すつかり治つていきますから、安心して働いてください。奥さんには、おいぶん苦勞させたのですから、たまには一箱に温泉へでも行くことですね。」その人は、冗談をいながらも、涙をひとつぶやどしていた。治療のよろこびをわかちあえる人をもつことは、めぐまれたことである。らいという病名によつて、みずからよろこびをわかちうる人と断絶してしまつた多くの人々にとつて、孤独にかろつた治療は、冷たい争奪でしかないのかも知れない。らい予防法第二条の、「国及び地方公共団体は、つねに、……らいに關する正しい知識の

普及を図らねばならない」といふ言葉が、實際的には、どれほどおこなわれているのだろうか。つねに「し」とうたった三字に、私は、嚴肅な気持ちをもたされている。時に行うのはたやすいことだ。つねにやることの困難さを、口惜しいまでに自覚している私にとって、予防法のこの三字は何とやらぞらしい修辭ではないか。療養所にあつて、私たちは、らいのことばかり、つねに、考えさせられている。そして、このように検診にまわつても、らいのことばかりやっている。しかし、私ひとりの考へも行動も、結局は、広い社会と地域のひとつの兵にすぎない。らいに關係のない一般社会にとつて、らいといふ、あるいは一瞬の意識をかすめる問題でしかない。らいに關する偏見もうすれて来た今日……などという、きまり文句が療養者の一部に生まれつつあるとしても、それは一体、どのような具體的な事實をふまえているのだろうか。なるほど、らいに關心をもち、療養所を訪れるほどの人々は、たしかに大風子油時代と今日との大きな差にも注目し、社会復帰にも深い理解をもつてくれてはいる。だが、今日も、殆んど日本人の意識の中にあるらいは、大風子油時代から何ほどの前進もありはしない。そのことを、私は検診にまわり、在宅の人々の口から痛いほど間接的にきかされているのだ。国と地方公共団体は、一体らいに對して、つねにどのような知識を、どのような方法で、どれだけ普及したのであるか。らい予防法が改正されて十年をこえた。十年間、つねに、どのような正しい知識が国民にゆきわたったのだろうか。現実に、どれだけの予算がそのために費されたのであろう。偏見が現実にうすれているなら、私は在宅の人々から嘆きをきくことももっと稀であるはずなのだ。らいの新しい知識が、療養者にだけ普及しても、一般社会にゆきわたらないという一方交通が、いつまで日本でつづくのである

うか、療養所へ来て、らしいの新しい知識を叫ぶよりも、もっとゆりうごかしめざめさせるべき対象が他所にあるのだ。療養者の知識と一般大衆の偏見との溝をうめなければ、正しい知識は空転するだけではないのか。いづゆるらしいの正しい知識が、一体、感情というものにどれだけたちまかえるかが、今後の問題であるはずだ。いづゆるらしいの正しい知識は、安易な道を歩みすぎてはいないのだろうか。多くの困難をのりこえ、きたえられ、耐えぬいたものでなければ、そしてそののちも、なおかつ真実性を失わぬ知識でなければ、その知識は感情にまでたかめられはすまい。感情にうらうちされた知識でなければ、人をうち、人を行爲へとみちびきほしないのではなからうか。

滋賀県の検診で、私はほぼ琵琶湖を一周した。毎年とおる道を、私はいつも心にとどめようとした。そして、年々の変貌を、心の中で鮮明にとどめようとした。それは、私にとって、ひとつの役目となっている。私の検診にまわる、多くの府県の風物は、そこをすぎゆく私の心をよぎるだけのものではない。それそれの風物は、そこに生まれ、そこに育ち、不幸にしてらいにおかされ、今は光明園で療養する人たちのものであった。療養する人たちの風土は、日ごとに変貌をとげつつある。それは、おおよそは、自然の風物を破壊する作業によっていた。躍進とか、建設という名のもとに、無計画に日本の風土はすたすたにさいなまれていた。美田が工場用地となつてゆく反面、沼や海が干拓地にかえられてゆくという矛盾がくりかえされている。私は、療養する人にかわつて、なかんずく、視力のうばわれた人にかわつて、その人々の風物を見つめて帰らなければならぬ気がしていた。堅田の湖岸から対岸に弧を描く琵琶湖大橋や、比良山に

つけられたカーレーター 伊吹山の有料道路、東海道新幹線、名神高速道路など、小学生が瞳をかがやかすようなものにも、私は、やはり心をはずませて見入った。セメント工場のためは、まっ白となった重要文化財の神社や、彦根城にできた舟橋聖一のあやしげな碑や、「花の生涯濃」と名づけた土産物も、私の心にきざんでおいた。近畿北陸一帯をめぐり、私はその風物とともに、その地の訛にも心がひかれた。光明園での診察のとき、言葉のわずかな片隅に、どこかの方言と、ここの訛を聞きだしたとき、私はただちに、その言葉の郷土の風物がうかんだ。訛とかが方言は、本来、その風土とともに生きていく。光明園に集まった人々の言葉の中に、かすかにとどめられた訛は、やはり本来の風土を求めているのかもしれない。私は、人々の訛と、本来の風土とを、心のなかで結びつけられることをねがった。そして、その日から、私は検診のたびに、訛や方言に心をかたむけた。光明園での診察の日々に、耳にしたかすかな訛から、私はとおひすぎたその地方の風景を想起したし、検診の日日には、ゆきあう風景の中に、豪農者の誰彼の顔を思い浮かべることができた。旅とは、本来そのようなものである。光明園にいたおかげで、私は畑をつくることができた。島の補土を耕やしている私に、湖岸の畑の土の黒さが眼にしみた。畑土がこのように黒くなるには、どれほど長い年月を、どれほどやすみなく耕やし施肥された、ことであらう。一つねにしという言葉は、たとえは補土がこのように黒土となってゆく過程のようなものである。十分に団粒化され、排水も保水も申しぶんのないといった畑土を、私は車からおりてにぎりしめたくさえ思った。天地が文しをしておいた、宮舎のわが家の畑にも、朝な夕な霜がおりているだろうと、土をみつめながら想ってみた。

奈良もまた、心ない資本力に、ひどく破壊されつつあった。奈良に来て、寒さがぐっと増した
感じであった。古寺と古墳を遠景にして、つぎつぎとすぎさる風物をみていると、「大和は国の
まほろばしとうたつた戴冠詩人の御愁は、そのいつかたへそそがれたのかと思つた。二上山に灰
色の雲がかり、日がかげっているのをみると、古代の大和もそのようであつたのかも知れない
と思われる。だが、龍田川の水は濁り、三笠山に俗悪なホテルがたちならんでいるのは、西部割
の背景かとさえ思われた。興福寺、薬師寺、法隆寺、法輪寺の塔を、みちみちにみた。それらの
塔は、静かに地上にたつていた。塔は、私たちの眼と心を、はるかな天上へとむけさせるために
あつた。地にいる人間が、塔にみちびかれて、より高いものをみあげるために塔はあつた。それ
らの塔は、登るためにあるのではなく、みあげるためであつた。塔は、久遠の光をゆびさすもの
であつた。だから、永遠の世界と、私とをつなぐ美しい媒体である。沈黙の詩ともいふべきもの
である。私たちは、地の上にしつかりと足をおいて、魂を塔によつて高めることができる。塔は
発端のように地の上にあつた。だから、塔は無限な高みをもつているといえよう。キョウトタワ
ーのおのみにくい構築物は、塔とはまさに反対のものであつた。人は、巨大なタワーの空洞の中
にすいあげられるのだ。そして、すいあげられた人ははうり出されて、みにくい人間住居の広
りを見下すのであつた。それには、はげしいめまいがともなつている。めまいをともなつて見下
される地上に、けたして何かあるのだろうか。人間世界のハラワタをみつめた人たちはふたたび
タワーの空洞へなげこまれ、地上にかえることになつてゐる。タワーは、いわば、人間をすいこ
みはきだす巨大なコンベアーであつて、それにのせられた人間は、めまいを起すしくみになつて

いるといえよう。めまいとは、地を失った人間に起る現象なのである。現代人とキョウトタワ
ーのもつみにくさは、いわばそのようなものである。塔は信仰の所産であった。キョウトタ
ワ―は勃起した資本であった。

宇陀郡に入つて、とある山麓で車をおりた私と担当者の山村さんとは、ゴム長にはきかえて
ぬがるみの山道をのぼつた。泥の中から長靴をぬきだすには、一歩一歩力がいった。「ここでこ
ろびでもすれば目もあてられませんな」と冗談は言つたものの、頰までほころばすわけにはわか
なかつた。昨年も、この道を福森さんとのぼつた。昨年はぬがるみとともに雪もつもつていた。
検診袍に、いつのまにか泥がついていた。その山の家で、青年を診察した。彼の家はひどく豪放
な作りの大きな家であつた。しかし、彼は、その家の藁屋根をみおろす、小高い場所にたてられ
た作事小屋の二階に住んでいた。部会のごみごみした家にくらべれば、その二階はかなり住み心
地もいいと思えたが、それでも、ひとりの夜を、彼は何を思つてすごしているのかと気がかりだ
つた。恐らく彼の戦死した兄であろうが、軍服姿の青年の顔がかかげられていた。村の人々は、
あんなかく、光明園から帰つた彼をむかへ入れてくれるという。だが、高度の四肢の障害が
彼の今後の生活にどのような支障をもたらすかと、心配でならなかつた。四肢の障害をこえて、
カブよく生きてほしいと思つた。かつては、母とともに映画へも行った彼だつたという。だが、
このごろは、映画へもゆかなくなつたらしい。彼の友人たちは、彼に遊びに来るようにとさそつ
てくれるのだが、遊びに行くこともしなくなつたらしい。そうした彼の気持が、鋭敏に私にもわ
かるだけに、よけいに明るくなつてほしかつた。この青年だけではない。和歌山県でもよく働い

ている青年を知っている。しかし友人が次々と結婚してゆくなかで、独身のままでいるこれらの青年をみると、何とかしてあげたいと思わずにはいられない。孤独の夜はながいものなのである。再びめぐるみの山道へ出て、登るときよりも、よけいに気をくばりながら、一歩一歩山を下りだした。「どこかに、いい花嫁さんはないのですかね」と山村さんにはなしかけた。各県の担当者の人々にも相談して、なるべく多くの良縁をつくりたいものだと思った。めかるみを歩きながら、私は考えた。療養所職員のらいに對する偏見などという論が、療養者側から提示された。愛生園では、盧沼論文をめぐって、なかなか活潑な意見がでてゐるらしい。らいに對する偏見をいだいて、私はこんなどろんご道を歩いてゐるのだろうか。今の青年を診察し、はげましたのも偏見にいろどられた私の仕事なのであるか。療養所へ入る必要のない人を入れないようにするといった私の考文もまた、偏見なのであるか。しかし、少くとも、私は私の正しいと信じてゐるやり方で、しかも私自身の誠意をつくして、らいを病む人のために働いており、らいに對する偏見と戦つてゐるつもりなのだ。私は、少くとも、実行してゐる。歩いてゐる。働いてゐる。職員の偏見について論議してゐる療養者は、偏見との戦いのために、自分の体をはって、何を實行し、どれだけ歩き、どれだけ働いてゐるのだろうか。妻と子供をつれて島へ赴任するということを、自分の意志で決めたとき、ひとつの大きな決断があった。他の職員も、それぞれ大きな決断があった。療養者側には、偏見との戦いについて、はたしてどれほどの決断があったのか。他人の偏見をあげつらう以前に、自分自身のらいそのものを治すためどれほどの決断をしてゐるのであるか。本来、手をとりあつて共に偏見打破につとめるべき療養者と職員とを、ことさらに

いがみ合わせているのは誰なのか。ことさらに一般的抽象的らしい所見をあげて、ことさらに興味の別的な問題とすりかえているのは誰なのか。叫ぶよりも実行すること、書くよりも歩くことの方が大切なのではないか。ういは五年で絶対なおるとしゃべることより、二年か三年で治すことの方が大切なのではないか。何もしないで、大きな顔で、いろいろなことを論議している滑稽さを、めぐるみの中で一步一步こぼれぬように歩んでる私の足が、微笑をもって踏みつけてゆくようであった。宇陀郡の山のためたい空気が、塩沼論文や職官偏見などのコップの中のさざ波でほてった私を、快くつつんでくれた。

その夕方、光明園入所者の奥さんが、私を宿に訪れるはずであったが、その時間まで、三時間の暇ができた。私けふらりと宿を出て、近くの国立博物館へ入った。館内は私ひとりきりだった。夕近い館内に、なつかしい仏像が、くろくろとたっていた。閉館の時間が迫ってくると、あちこちで扉がおりる音がした。私は最後の部屋で、二つのものに心をうたれていた。ひとつは、廢仏棄釈のために、額をけずりおとされた石仏であった。今ひとつは、寺の基壇にうめられた宝石の類であった。昔の人は、寺を建てる地下に、おのれの秘する最も尊い宝玉を埋めた。寺自体、それには莫大な資本によって作りあげられるものであった。仏像もまた、はげに安置されるものであった。だが、人は、その地中に、宝玉を埋めたのであった。あるいは、仏の胎内に、最も尊い宝を秘めたのだ。キョウトタワーを構成する安直な心理と、最も尊いものを眼のとどかぬ所へ埋めた精神との対比を、私は感じないわけにゆかなかった。いかに批判かあるうとも、らしい意義所は、本来らしいを病む人のために供えられたものである。らしいを病む人が、ここに来て、治療を

決断したときに、その決断を執行するために構成されたものなのだ。だから、どのように変貌を
とげようと、療養所はらいを病む人が治るために存在しなければならぬ。光明園という療養所
に、私は、やはり宝玉が埋められているように思えた。その宝玉は、外島時代からのものも加え
られているであろう。その宝玉とは、名もなき、病者と賦員の、ひとりひとりの歴史であると思
った。その歴史は、かなしみにいさどられているものかも知れぬ。誠実で勤勉なひとりひとりの
小さい歴史なのである。回教徒におそわれた石仏と同様に、齋仏齋釈によって魂をけずられた
石仏をみたとき、人間のおろかさをおぼわすにいられた。この石仏だけではない。宇治の平
等院でも私は鳳凰堂の螺鈿や金具に齋仏齋釈のつめあとをみた。文化財は、それを創造したもの
の高い精神を理解できぬ小人どもの手で、幾度か破壊された。嘗々として築きあげた文化を、戦
争のためたちまち破壊し、再びつくりあげては、またこわしてゆく。人間の歴史のおろかなく、
かえして、今日もなおつづいている。明治の文明は、このようなおそろるべき破壊ののちに雑然と
できたものであった。当時の仏教界に、このような低い意識の破壊力をしりおけるだけの精
神はなかつたのであろうか。なければ、やはりそのような破壊力を、ただ手をこまわいてなげく
だけであつたのかも知れない。現実に、齋仏齋釈は身辺に起つて、今日、今日、すこ
まじし齋仏齋釈が起つて、明治以上のはげしい破壊力で、そのアトム化の作用が侵入し
ている。らいの世界でも、齋仏齋釈的運動がいまやおこりつつある。否定し破壊する力の前には、
それをつくりあげた魂も愛も、もはや忘れ去られて、ただ、破壊力のために、それを推進す
るらいを病む人自身が不幸にならぬことを祈るばかりではない。破壊力は、本来、ひとりひとりの魂

と幸福などというものには考慮なく、全面的に及ぼされるものなのだからである。原子爆弾に、
どうして、その日の、玄島の一軒の家の中の、一室でかわされていた。若い母とみどり児との、
清い愛などがわがらうか。そのように、らいの世界の破壊力は、らいを病む人がつかみとった、
個の幸福などには見むきもしないものなのだ。

準急比叡が、杉根をすぎるころは、全く雪の世界となった。柏原や関が原一帯は、厚く深い雪
におおわれていた。山は、梁指の描いた雪景であった。光明園で、らいを思うひとりの想念は、
いわば、このような雪にとじこめられた想念であるのかも知れない。鳥をけなれ、いま、一般社
会の中で、光明園を思い、らいを考ふる私の想念は、鳥のように軽くなっているのか。それにし
ても、私もまた、ひとりの古風な人間として、葬り去られる日もある。幾十年のうちに、らい
療養所は閉鎖され、らいの歴史が閉じたとき、療養所の中で病とたたかっていたひとりひとりの歴史
と、ここに勤務したつましい職員の歴史もまた、忘れ去られよう。その日からみれば、療養所
は、うたかたのものにすぎまい。うたかたの忘れ去られるべき日日の道程は、苦しくともたどら
ねばならぬ。らいを志す医師は、らいのなくなる日のために働いている。自らを無用のものたら
しめるべき努力をしている医師は、おそらくらいの世界からいのものである。自己の有用性を
なげき、みすからを無用とするための努力をし、らいに対して偏見をもつもののしられていて、
この滑稽な存在をみよ。雪の世界の中を小島が飛び去った。雪の中で、鳥も翼様にくるすんだ。
軽い私の想念も、雪景の中では、このようにくろすむのであるうか。

「楓」二九四号（昭和四十年五月一日 關山集 邑久光明園慰安会発行）より。

仁科白谷

— 虫明散歩道 五・六一

泉田禹雄

上

虫明には墓が多い。散歩するとどこかに墓がみられる。思いがけぬところに、おどろくほど古い墓が、ひっそりとたっている。昔から、ここには平和な墓しがあったのであろう。そして今日もなお、人間の破壊力が、ここには浸透していないからである。虫明が、岡山県のひどい田舎だと思っている人々も、これまでの散歩道で、これは大したところだと思いなおされたであらう。伊水氏の知行所であっただけに、昔から、虫明には、儒学もさかえ、文人墨客も多かったのである。それだけに碑誌をきざんだ墓も多い。それらの碑誌から、私たちは、思いがけない虫明の過去の断面を、そのひとりの人物誌を通じて、うかがうことができる。小さな場所に、これほど豊かな歴史のある所は、日本でも、数少ないのである。

円通山を散歩したとき、伊木内記忠亮遺髪之塚をみた。他國で客死した人のために、その遺髪を埋めて墓としたことに、私は深い静かな感動をおぼえた。その碑誌の言葉が、ありありと想起されよう。長島や円通山の墓を訪れた人は、ニッ鼻や赤土山を散歩するがよい。ここにも、静かな墓郡が、あなたをむかえてくれるよう。空と海のはざまにきらめく陽光は、そこではしはし、時間の流れをとどめて、白く輝くかのようだ。赤土山には、その一劃に納へおさめ、家の墓域があ

る。由明八景に「しばしば引用した『玉嶺叢談』の香齋の納玉嶺の墓がある。そして、その玉嶺の墓にむかいあって、小さな墓がある。類真卿を思わせる雄大な筆蹟で記された文字は、しかし、清らかな淡さをそわすにはおかない。

納登美（おさめ とみ）は、よび名を令叔といい、納尚堅（号は玉嶺）の娘で、母は中条家の人である。享和三年（一八〇三）に由明に生まれた。四五歳で漢詩をそらんじ、八歳で琴をたくみにかなでた。オたけてみめうるわしい人であった。二十一歳で、当国の日笠の板井恒輔の妻となった。婚家で、親と夫によくつかえ、主婦のつとめをけたした。文政九年（一八二六）七月十八日になくなった。二十四歳だった。板井家墓地に葬られ、戒名を正山院妙術という。父と母は、ついに子供も生まれままに、さきだつてしまった娘のために、位牌を興禪寺にあずけて永代祠堂をたのみ、そして、生まれたときに判つたうぶ毛と、臍の緒とを、唐琴の峯の北にある赤土山に埋めて、追善のよすがとしたのである。同本意する。とつぎ先で、自分の娘を失つた、納王嶺夫妻のなげきが、この近い文章の中から、あふれていゝるではないか。そして、このもきあつた二墓の墓をみると、親と子の愛を思い、ゆたかな魂の交流を感じさせられる。伊木忠亮といい、納登美といい、いずれも、由明の外で死に、遺骨もその地に埋められながらも、今は、由明にある祖先の墓地のゆたかな白光につつまれて、「骨なき墓」の下で、その魂を休ませているのである。

だが、由明の過去には、それとは全く逆の場合もある。由明の人でありながら、ついに由明の土とはなり得なかつた例もあるのだ。に科琴浦へにしな、きんぼ」とに科白谷へにしな、け、こく

という父と子の場合もそうなのである。しかも、この父と子のために、永遠に遺るべき、立派な墓碑銘が作られながらも、その文字は、ついに墓に刻まれることがなかつたのである。虫明散歩道といいながら、虫明にはない二つの墓をたどらねばならぬ。この父と子とを忘れず、虫明を語ることでできないからである。私の兄の蔵書の中から、「事夷文篇」四巻をみつけた。これは日本の碑誌を集めた明治時代の本である。これに虫明に關係のある人物に関するものが、三篇のせられていた。

備前州老伊木忠貞墓碣

無名氏

琴浦に科先生墓碣銘

龜田興

に科禮宗墓碑銘

龜田長祥

である。三万三千石、池田藩家老職であつた伊木忠貞の墓碣（ぼけつ）が、今はそれを併した人の名もわからないのだが、同じ伊木氏の下級武士だつた父と、その息子の墓碑銘を併した人の名は、はつきりとしている。しかも、この龜田興と龜田長祥とは、日本有数の儒者であつた龜田鵬齋と、その養子の龜田綾瀨（へりようらい）その人である。このような深出した儒者に、墓碑銘を作らせた。に科琴浦とに科白谷とは、どんな人だつたのであろうか。これから二回にわたつて、その墓碑銘をたどりながら、散歩してみたい。今回は龜田鵬齋が作つた、琴浦の墓碑銘をみよう。

「琴浦に科先生墓碣銘

龜田興」

琴浦は号であるから、苗字の上につけてある。頼山陽の墓なら、山陽頼先生之墓となるわけである。龜田興とあるが、これは龜田鵬齋である。江戸の儒者で宝暦二年（一七五二）に生まれた。

名曰長興。通称は文左衛門で、よび名を禊龍といった。鵬斎はその号で善身堂とも号した。家は代々上野国で農業をしていたが、父の長安が晩年に江戸へ出て鵬斎をうんだ。後世に折衷学の祖とたたえられている井上金峨（一七三二—一七八四）の門に入り、山本北山や種狂斎とともに金峨の門下の秀才と注目された。壮年となるに及んで、駿河白で塾を開き、門弟も多く集まり、名声は一時に高かった。祖孫や南郭らの説を排撃し、江戸の文風、このために一変したといわれる。天明三年に、浅間が大噴火し、日本各地が饑饉となったとき、自分の歎書をことごとく売って貧民に金を与えた。寛政二年五月、異学を禁ずる命令が出された。そのとき、隣人が、その批判の論を出したところ、これが鵬斎の代作とまちがえられ、門人の就職が禁ぜられ、そのため門人が去り、生活に苦しむこととなった。江戸下谷金杉村に移って、農民となったが、生活がでさず、筆耕をして、余命をおくり、文政九年（一八二六）七十五歳で死んだ。鵬斎の学問は、金峨の流れをくみ、宋代の儒者の説だけにならず、歴代の中国の儒者の説をたくみに統一し、更に老子莊子の説を尊び、論家を調和して折衷学を發展させた。著書には、「論語撮解」「大学私衛」「中庸并義」「善身堂文集」「老荘摺解」「旧注家求」「国字解」などがある。鵬斎はまた漢詩にも書画にも秀でていた。

「先生の実の名は貞、よび名は正夫、琴浦はその号である。姓は仁科氏で、備前の人である。仁科家は、代々、伊木氏に仕えていた。」

琴浦の諱（いみな）と字（あざな）と号が書かれている。儒者だから、中国風に、このように名が多いのである。しかし、彼は、仁科源太夫が、その名であった。仁科家門、伊木の家臣だと

あるが、慶長八年の「伊木氏分限帳」にも、元禄十三年の「忠虎公士牒」にも、その姓はみられない。仁科家は伊木譜代の臣とはみえず、下級の新規召抱えの家ではないかと思われる。琴浦は宝暦六年（一七五六）に虫明で生まれた。琴浦が間口の人であったという伝承があるがたしかなことはいかない。琴浦の号が、唐琴の浦に由来することは、新井白石の詩の八景のうち、「夜雨鳴琴浦」を思いだして頂ければ、うなづけよう。納玉嶺の号は、玉嶺山に由来している。玉嶺の長男の尚恒の号は追門で、これは虫明の瀬戸である。中国風に、虫明のことを明浦、唐琴の岩を弹琴岩というのである。琴浦の伊木家での地位は、徒士（かちん）で、役柄は御作迎方であった。現代風にいえば会計課勤務である。嘉永七年二月の「伊木氏御印帳」をみると、この役柄は三十三俵二人というくらいの俸給で、お義理にも高給などといえるものではなく、むしろ生活に苦しい給料であった。

「先生の学問は、深くて立派であり、最も老荘の学に通じていた。」

琴浦が誰について学問をしたのか、明らかではない。下級武士の子が、名だたる儒者の塾へ遊学できるはずはなく、また、それができたとすれば、この墓碑銘に、師の名もとめられるはずである。老荘の学に通じていたというのは、当時の官学が、程朱学（ただけに注目される）林羅山によっておしすすめられた、徳川幕府の御用儒学は、程朱学一辺倒であった。幕府と池田藩と伊木家という縦の関連の中では、「天下を手にとって、これを正しくしようと思ひぬが、自分からみると、そんなことはできしない。天下というのは、人間によって左右されるよくなものではない。よくしようとする輩は、かえってこれをそごなうものだ。天下をにぎろうと

する者は、かえって失つてしまふものなのだ。(老子廿九)と云つた思想が奨励されるはずがない。琴浦自身の才能と、その育つた環境が、彼に老荘学への眼をひらかせたのであるうか。或は、黒井山等覺寺の僧あたりから、手ほどきをうけ、自分の力で、ぐんぐんと老荘学を大成させたのかも知れない。武士の子といつても頭のいいのがそつていたわけではない。まず普通の武士の子であれば、孝経、小學、四書あたりをすませば、学成れりとして、あとは武芸にいそしんだであらう。琴浦は、そうした普通の武士の子供よりも、ほるかにすぐれた頭脳の持主であり、また自分でも刻苦自習したのであらうと考えられる。伊木家には、虫明の茶屋(別邸である)の書院に、虫明学問所を経営し、家臣の子弟の文武の教導にあたつていた。しかし、この制度が完成したのは、享和元年といわれ、琴浦の子供の頃には、まだ制度化されてはいない。伊木の虫明家臣団の中の、学問に通じた者から、儒学の手ほどきをうけたと考えるのが、まず穩当であらう。

「そのひとりとなりは、才氣にみち、潔白で、強く正しく言葉にいささかの卑屈さがなく、行動にいささかのまがったところがあった。その体は、大きくいかつい人であった。そのため、同僚はみな、彼をげげがっていた。」

このくだりを見ると、人は、すがすがしい豪傑を思ふかべるであらう。だが、こうした人物に、言仕えが、うまくゆくわけのものではない。太平の世であれば、武士とはいつても、地方公務員の下っ端でしかない。お役所づとめなんてものは、周囲をみまわしてもわかるように、上へつらい、下に恩を売り、同僚と妥協し、適当に卑屈に、適当に尊大でなければ、うまくゆかないという、変ちくりんな状態になつてゐるのは、昔も今もかわりない。「予算がありませんので」

「極力 御期待にそうべくはげんでおりますが」「まことに遺憾に存じます」ぐらいの言葉をくりがえしておれば、あとは ハンコをボンスカおして、日が暮れようというものである。出世をするなら、当落スレスレの議員候補者を、役職を利用して応援し、女房には「何トカ先主後援会」なんてものの、入会申込書にハンコを束めさせ、適当に自分をうりこんでおくことだ。ワラをもつかむ候補者なら、とびついてくる。当選すれば、何とか予算のフンドリに働いてくれようし、停年になったとき、骨をひろってくれるはず。まあ、地方自治体の何かの選挙にでも出たときに、えらい先生が中央からかけつけて、応援してくれようというものだ。力があって、頭がよくて、まがったことが大きい、という琴浦の人物像からは、どう考えても、出世タイプの能吏の姿が挿げない。同僚がら、煙たがられるのも無理はない。上役にしたって、こんな人物を使いたいこせぬわけがなく、やはり、煙たい部下であったらう。

「のちに お氣にいひの冢求の つげ口のため、牢にとじこめられた。罪状をしらべたが、証拠のあるうけはずはなく、ゆるされた。およそ三百日ばかり、牢につながれていた。」

この事件が起ったのはいづごろかは、実に重要なポイントになるが、まだ、残念ながらわからない。伊木家八代の忠福の時代だと思われる。琴浦が二十歳のとき、伊木忠福が二十八歳で、監督をついだのである。たまたま虫明の伊木家の金蔵の銃がやぶられ、公金が盗まれるという事件が起ったのである。平素けむたがられている人物は、こうしたときに場をする。「に科源大夫は、貪婪だし、力が強い。あの金蔵の銃前をわざ切るなんてことは、虫明ひろしといえども、源大夫以外にはできるもんか」などと、まことしやかに、ささやく者がいたのである。その目でみれば

何でもあやしくみえるのが、人の常である。琴浦入牢の理由は、こんな事件であった。千言万語の申しひらきをすれば、まだ少しはしおらしいが、琴浦は、「みずからかえりみていざさかのやましい所はござらぬ」と言ったきり黙って牢内で、本を書きはじめたのである。それが「莊子解し十巻だといわれている。」「自分が潔白であることを知りながらしかも恥辱を守るものは、やがて天下に通ずる典型となろう」という莊子天下篇の言葉は、この獄中の琴浦を、限りなく力づけたと思われる。

笑って獄中に坐す鉄石の心

この心、巨人の心にはじま。

知るやいなや、ちかごろの豪傑の士

周易を血書せし三宅万年の心を。

琴浦は、この獄中の思いを、こんな七絶句でうたっている。起承結の三句の下を、すべて心という字でおしているのは、ちよつと珍らしい詩でけなかるうか、獄中に坐して、黙々と莊子に向い、その註解をつづけた琴浦の姿は、すべての人が、すがすがしいと云うが、私は、琴浦の妻の苦しみを思わずにはおれない。すがすがしい姿で、身すぎ世すぎができるのなら、人は何もあぐせくしない。金はなく、夫は牢に十月入れられ、周囲の眼は、盗人の妻として、彼女には冷たかつたはずである。嫌疑がはれるまでは、たとい、琴浦の人柄をしい、彼の無実を信じた人たちがいたとしても、大っぴらに、琴浦の妻に同情できるものではない。琴浦には、三人の子があった。そのうち何人まで生まれていたか明らかにできないが、幼い子をかかえた琴浦の妻の苦

「そこで 病氣を理由にして辞職し 遂に妻と子供をひきつれて江戸に来て、八年のあいだ わびすまいをした。」

疑いをかけられたため 辞職したが、その理由を病氣としたのは 今も昔もかわらぬ日本の習慣である。「一身上の都合により」なんてセリフが、今日でも重宝がられているのは、にがにがしいことである。疑いをかけられ、晴天白日の身となって、なお辞職したというのは 古来いさぎよい人士の行ってきたところである。ステ値同様で官宅を手にいれ、送挙違反で部下があげられ、世をあげての批判をうけても シャーシャーと議員のバツシをつけて議会へ登院できるほど 良心が麻痺している御仁に 琴浦の爪の垢でも送りたい。疑獄や汚職、送挙違反など、高級官僚につきまとう影門くらい、無罪になればハクをつけてかえり咲き、うまくいかねば、外郭団体へもぐりこみ、時節到来をまつ。こんな風でなければ 役人として金がたまるはずはない。小橋匡によれば 琴浦は 浪人となってから、倉敷の酒津などを流寓すること十年のち、江戸へ出たということになっているが、鴈齋の文章からは 備中に十年も流寓したとは思えない。仁科白谷が、虫明で生まれたか、倉敷で生まれたか、ここで別れてくるのである。琴浦が江戸へ下ったのは寛政七年（一七九五）である。ときに、琴浦は四十歳、次男の白谷は五歳であった。備中に十年間流寓したとすれば、白谷は倉敷で生まれたとしても、不思議ではない。だが、鴈齋の文章をみれば、琴浦が嶺に入られたとき、すでに白谷も生まれていたと考える方が自然である。そうすれば、白谷は虫明で生まれたことになる。確証がでるまでは、白谷は虫明で生まれたと考えておきたい。それは、白谷の号は、虫明の白谷へしらたに、に由来するからである。おちぶれ

た親子五人の旅である。長男の正、長女の薫子、未っ子の源蔵をみつめる琴浦夫妻には、もとより前途の見通しのあるうはすもなく、江戸で何とかすごせる仕事でもあれば、という、はかない期待があるだけであった。貧しい親子の旅である。子供に、ひもじい夜もあったであらう。

「流れついた土地のこととて、知りあいのあるわけがなく、金をかしてもらえらあてもあろうはずはなく、言うにいわれぬどん底生活であった。江戸のかりすまいの間に、その妻と長男がなくなつたが、この二人の寿命をちぢめたのは、皆しい生活のため、心の中までわすらうといつた悲惨さに關係はないと言ふことができようか。」

おちぶれるだけおちぶれてしまつた生活であつた。一日として豊かな暮らしを、琴浦とともにできなかつた妻は、極貧のうち、異郷で死んだ。琴浦の江戸でのかりすまいは、小石川であらう。それ口、彼の長男の正は、好古といひ、礫川と号したことから推測できるのである。蜀山人水田南畝の「奴師勞之」の十九に「彌三郎物語に、鶯鴨の古文書に、小石川の事を礫川と書けり。詩人の礫水といえるも是によるなるべし。」とあつて、礫川が小石川であることを明らかにしている。その好古がこんなみずみずしい「客夜」といふ五言律詩をのこしている。

秋の夜はいよいよふけて
はるばるときたる旅かな
風吹けばともしびゆらぎ
雨のなか遠つせきこけ

とつ國にきてなげかるる
ふるさとの老いし父母
夢かなしいねがたまかな
坐りきく遠きかりがね

しかし、彼の若いこの詩情も、極貧の中で、花ひらくことなく、うせてしまったのだ。八年にわたる琴浦の江戸の生活は、極貧のうちにあけくれ、しかも、妻と長男の死というかけがえのない代償さえも与えねばならなかった。琴浦にとつて、江戸は、終生往みうるどころではなかった。

「そんなことでいとけない娘と、おさない次男坊をつれて、再び吉備の国にかえり、寺小屋の師匠となつて、口に糊することとなり、この上もない生活苦の中でしたのである。江戸へゆくときは、親子五人の旅だった。だが失意のうちに、享和二年（一八一〇）江戸を去るときは、親子三人の旅であった。ときに、琴浦四十七歳、白谷は十二歳になっていた。小橋匠によれば、琴浦は、江戸を口なれて、かねて彼の人柄をしたっていた垣内溪琴のまねきによつて、溪琴の故郷の伊紀へゆき、ここで十年をすごし、人々に多大の薫陶を及ぼしたということになっている。しかし、鷹斎の文章では、すぐに吉備の国へそれは備前か備中か、明らかではないが、に帰つたことになっている。垣内溪琴というの口、菊池溪琴のことで、江戸で須原屋という書店をひらいていた。本家は、紀州の有田郡栖原村にあり、ここで生まれた。溪琴をよくし、琴浦の

息子のに科白谷と、しきりに唱和している。白谷もまた、溪琴の家をおとすれ、そこから那智の滝など、南紀に赴んで、多くの詩をのこしている。しかし、小橋説は、ちよつといただけない。溪琴は享和三年に生まれ、明治十四年一月十六日、八十三歳で東京で歿したのである。だから、琴浦が江戸を去った享和二年には、まだ生まれていなかった。強いていえば、母の胎内にいられてである。その溪琴が、どうして、琴浦の人柄をしたい、紀伊に草鞋を解くことを、運望できたのであるか。今は、やはり確証が与えられるまでは、鵲斎の記載のままに、備前が備中に帰って、十数年の苦しい生活をすごしたとみるべきである。娘の繁子が、牛窓の那須家へ嫁いだのも、その間のことであり、やはり、琴浦が、江戸から備前が備中に帰っていたらこそ、この縁話も可能であつたと考えられはしないであらうか。

琴浦は、虫明を去って十九年ののち、再び虫明を訪れている。それは、おそらく、寺小屋の師匠とやめ、娘の繁子のとつぎ先の、牛窓の那須家へ身をよせるときのことか、或は身をよせてからのことであつた。

帰郷

わかき日に故郷をけなれ
年老いてまたかえり来め
かの山よわれを知れるや
酒くめばなみだながるる

旧宅をすきて

わが家はなここにあり

そのままに青きやなぎよ

春風にもかし見し月

また照らすさらばいし吾

帰郷

十九年のち故郷にかえり

やつれし我を知る人もなし

瀬戸には高く月すみわたる

月のみぞやしきもいまも

虫明に帰った琴浦の五言又は七言の絶句である。彼は、人目をほばかって、夜になつてから、虫明の道を散歩したのである。なつかしいわが家の前をすぎた。そこには他人が、すでに美しく住みついてゐるのだ。歩むところ、ことごとくが、期待に胸のふくれていた少年の日をおもひおこさせた。すべてがなつかしい故郷の風物であった。だが、彼は孤独であった。今は、虫明には琴浦を知つて、それと見わけてくれる人もいなくなった。伊木家も、主君の忠福は死に、昔い忠貞も世を去り、忠誠、忠順と、めまぐるしく相續者がかわつていた。かつての同僚も、或は死に或は隠居してゐる歳であつた。五歳年少の医官上森垣斎は、まだまだ元気であつたが、琴浦は

上浦氏をたすねただろうか。月だけが、春の清らかな月だけが、琴浦にとって、昔も今もやさしく照らしてくれた。老子の語の、和光同塵の光であるかのようだった。琴浦自身のすぎこしも、そのあふれる学識、その節操、ともに極貧の泥の中で、消えうせてしまっていた。琴浦の学識と詩才は、しかし、息子の白谷が、ぐんぐんと吸収し、より大きく育てあげようとしている。それだけが、現実の琴浦の、ただひとつの期待であった。どこからともなくにおう春の花の香があった。ふと、ういっしい花嫁姿の妻を、思いださずにはおれない。けなげな妻であった。いまはそれもない。に科家の墓地は、どこにあるか私は知らない。だが、虫明にはあったはずである。もしかすると、妻と長男の遺髪を、そと、墓地の一隅に埋めたかも知れぬ。そして、心弱くなつた彼は、春の月の下で、涙を流れるにまかせたのかも知れぬ。

「文化十一年、きのえいぬの歳の夏、五月八日に、病にかかり、にわかになつて死去した。享年五十九であつた。そこで、牛窓の本蓮寺に埋葬した。」

牛窓の本蓮寺は、山写を兼王山と称し、本門法華宗の名刹である。賞名日怡と賞名正諦の面上人は、私たちのために、種々御助力をたまわつた。西上人のお話によると、牛窓には那須家は多く、ことごとく、本蓮寺の檀家である。しかし、に科繁子のおついで那須家は、判然とせず、それと推測される家も、今は移住して、手がかりになりにくいとのことである。琴浦が、牛窓の那須家で死去したことは、ほぼ確実である。この点は、なお西上人の御助力により、しらべるつもりである。本蓮寺墓地の、どの地点に、琴浦の遺骸を埋めたかも、全く明らかではない。

「彼の奥さんは、植木家の人で、二人の息子と、一人の娘とを生んだ。長男を好古といひ

次に生まれた長女は、那須家にとついで、末っ子を幹（白谷と号す）といい、父の學問をひきつぎ、大変よく勉強する。先生は「老子解」二巻を著作して、すでに出版され、世にみとめられている。「莊子解」十巻は、獄につながれているときに、あらわしたものとかわれる。それらは、老子と莊子の思想である。無爲自化の意義を述べ、恬たん虚静のおもむきを説いたものであつて、詳細にそれを分析し、かくされた本義を、明確に提出したものであつた。彼の「莊子解」は、ついに出版されることはなかつた。彼の老莊への傾倒は、同じ老莊を重んずる龜田鵬斎と、唯一無上の友情をあたためる構縁となつたのである。鵬斎は、琴浦より、四歳年長であつた。

「彼の詩文は、稿いを受け、身の危険にさらされ、けわしい生活をしている中で生まれたもので、そのいざどおりと、ほげしい心のうごきをつたえる言葉は、きくものをして、すすりなき、涙をぬぐわしめずにはおかない。そのような詩文集が若干のこされてゐる。」
不幸にして、私は、琴浦ののこしたものを何一つみていない。所蔵している方があれば、披覽をゆるしていただきたい。また所在を知つておられる方は、それを教示して下さい方が幸甚である。

「今年の春、末っ子の幹が、山をこえ、あゆみを重ね、ひとりはるばる訪ねてきて、私に銘を請うた。さげは、「父がいまわのとき、あなたに銘をつくつてもらつてほしいと遺言しました」といふのである。私は先生とは、會さざらしの中で知りあつた。一目みて、心をゆるす仲となり、限りない有情によつて結ばれた。そして、額をあわせば酒をくみかわし、ともに胸のうちを語りあつたものであつた。先生は、鬚をふるわせ、手をにぎりしめ、机をたた

いて話された。その語気ははげしく、そばにいるものが、ちぢみあがるほどであった。ややもすれば、夜のあけるまで語りあかすというふうだった。いま、先生の死をきくにつけても、そのことどもを回想し、輝く声、清らかな面ざしが、さながら目にうかぶのである。またその息子を見ると、激しい同情の思いに、わが身がおののくばかりである。そこで、用紙を決めてゆらしつつ、これを書きしるす。墓にきざむ彼への歌は、

ああ正夫よ

なやみの中にて道を述べ

くるしみのうちに文を書きにき。

たといその家は貧しくも

記せしものはいと高し。

たといその身はうせぬとも

のこせし道は伝うべし。

思うに生涯貧なりき。

ああ、いたずらか。

天なるか。

鵬斎のこの墓碑銘の最終部に、これ以上つけくわえる言葉があろうか。今はただ、鵬斎の雄大な筆で描かれた、ありし日のいきいきとした琴浦の姿と、彼の死をいたむ傑出した儒者鵬斎のなげきと、うなだれている白谷の姿と、深く胸の底に描くだけである。

琴浦は、ついに、由明の土となることはできなかつた。亀田鵬齋が墓碑銘を撰してくれたのち、仁科白谷は、自身でその文章を、端正な文字で浄書し、父の墓をつくるどころまでこぎつけた。石工が、墓の棹石に、墓碑銘をきざみはじめた。正面に、大きく

琴浦 仁科 先生之墓

とほり、左側面から、鵬齋が父のために作ってくれた漢文を彫ってゆき、裏面とそして、右側面へとつづくはずであった。石工は、まず、左側面からほりはじめた。とびとびに四十字たらず、三行をまばらに彫ったとき、工事は中断せねばならなかつた。伊木家の家臣の一人が、中止を命じたのである。伊木の家臣のつげ口によって、卒にとじこめられたという記載があつた。ためである。伊木家知行地の由明の、つい目と鼻の先の牛窓で、しかも伊木家が家老をしている池田藩の領内で、このような文字を、石にきざんでのこすことは伊木家に対して不敵とされたためである。琴浦の墓石は、左側面に、わずかの文字をとどめたまま、むなしく、本蓮寺の竹藪の中へすてられてしまった。琴浦の墓礎は、未完に終つた。

昭和十年、琴浦の死後百二十二年ののち、この花崗岩の墓石が、琴浦のものであることが発見された。小橋匠の弟の、当時の牛窓町の小橋南強が、服部明道会と本蓮寺住職とにはかり、明道会の出費によつて、本蓮寺境内に、未完のまま、たてられた。墓石の裏面には、小橋匠の撰になる碑陰記を、曾名日怡上人の筆によつて、刻まれた。牛窓に、このような篤志の人々が存在したことは、由明のためにも幸せなことであつた。今は、牛窓の教育委員会の手で、立派な解説の額もたてられ、不遇な琴浦は、あたたかくまつられているのである。ついに、父の墓礎を未完に終

らせ。志をはたし得なかつた白谷が、後世、このような形で琴浦の墓が顕彰されようとは、思い及んだことであるうか。琴浦の墓碑は、未完であるだけに、なお深く、私たちの胸をうつのである。

(附 記)

この記載は、に科琴浦が、虫明の人であるという、先人たちの紹介にもとづいて書いたものが、私自身は、疑問がないわけではない。に科白谷が、虫明の人であるということには、文献的にも確実性がある。だが、に科琴浦の場合は、虫明の人であるという、歴然たる根拠は、私はまだ知らない。むしろ、岡山の人ではなかったかという私見さえ、目下のところ抱いている。文中、「帰郷」のところ、「瀬戸には高く月すみわたる」と記した場所も、「旭川にはきよき保山の月」と記すべきだと思っている。本文は「旭江清色三羊月」だからである。白谷の族にかかる、「三備詩送」で、白谷は父のことを、「仁科貞・字、正夫。号、琴浦。岡山の人」と記している。虫明の人たちは、ちゃんと「虫明の人」と書いているのだから、に科琴浦は、虫明の人ではなかったことになる。また、琴浦の作品「三羊歌」をみても、琴浦自身が岡山をうたい、獄中のことをしのび、故郷として岡山をなつかしんでいるのである。この作品から、出獄後、備中に十年いたという説が出る可能性はあるが、「苦節十年」式で、たしかな年数とはなりえない。

(「楓」三一—号、昭和四十一年十月一日発行)

下

虫明湾の北にぞって、東へと静かな道をたどると、二ッ鼻とよばれる所に、明るい墓地がある。虫明焼の名工 森香洲の墓をみつけることはたやすい。上森家の墓域に、上森坦斎の墓がある。頼真卿を思わせる雄渾な筆蹟が、私たちの心をうつ。碑誌は、に科白谷の撰である。

坦斎先生の墓

先生の実名は茂、よび名は仲成、姓は上森氏。坦斎とはその雅号である。備前虫明の人である。医師であった。ひととなりはまじめで且つ淳朴であった。本を読むのをたのしみとした。「論語論」「傷寒論注」など十四巻の著作がある。天保十三年へ一八四二一七月十九日になくなった。享年八十二であった。先生が危篤のとき、息子の簡が筆をすすめた。先生は「八十二歳という寿命をさすか、たのに、これ以上ながらえることもあるまい」とに、こり笑ってなくなったのであった。虫明の城山に葬った。私は、坦斎先生をたたえて、うたう。

ここぞ鳥なく城の跡

きみをとわにぞいつきなん。

海にかがやく日の光

山には清く泉わく。

空たかく 地はやすらけし

これにまされる供養なし。

に科 幹 しるす。

簡潔な白谷の文中に、おだやかな、坦齋のおもかげがしのばれる。白谷よりも三十歳も年長の坦齋ではあったが、生前、白谷とは詩でむすべれた仲であった。白谷の銘は、虫明の風土の美しさを、短い文字の中に、鮮かに描きだしている。白谷は、この美しい虫明に葬る以上の供養はあろうかとうたった。そのかげには、牛窓に葬ったが、ついに墓碑もたてられなかった。父の琴浦に對するすまなさが感じとれる。そして、に科白谷もまた、虫明を愛し、「明浦吟稿」という詩集で虫明をかぎりなくうたいながらも、ついに、虫明に葬られることはなかった。上森坦齋の死は、白谷の死にさきだつこと三年。坦齋の墓碑は、白谷最晩年の筆蹟である。

白谷の父、琴浦の墓碑銘は、江戸の大儒、龜田鵬斎の撰であった。白谷の墓銘は、鵬斎の養子の龜田綾瀨（りょうらい）の撰になる。不思議な縁縁である。綾瀨の号は、江戸の綾瀨へあやせしに由来する。龜田綾瀨の名は長粹、通称は三蔵で、政の学識と文才は、父の名をはずかしめなかった。善處加藤良白の「柳橋詩話」巻之下に、次のような記事がのせられている。

綾瀨は、隅田川の上流にあつて、実に景色のよい所である。だが、その名は、ほとんど知られていなかった。ところが、綾瀨先生があらわれるに及んで、天下の人は、ことごとく、まなこをめぐって、その景色を觀賞するようになり、また、その水際の中、舟でのり入れて、綾瀨とえにしをむすばぬものとしてはないありさまである。古今の名勝といえども、名人達士があつてこ

そ 世に知られるのである。中村周敬がこんな詩をつくっている。

親子で名儒というのは少い

雀はちゅんちゅん囀けろうとも

鵬（おおとり）は海を飛ばたく三千里

水平線には綾瀬の雪

周敬は、亀田鵬斎の弟子として永年勉強した人である。人柄は、ユーモラスで、酔いがまわると衣をはらっておどった。ああその人もすでない。

このような言葉から、亀田綾瀬が、いかにすぐれた人だったかがしのばれよう。彼は、白谷と大変親しいまじわりをしており、白谷の詩の多くに、評を加えている。その綾瀬の「に科礼宗墓碑銘」について、に科白谷の生涯をみよう。

「今はなき友、白谷は、生れつき文筆の才能にめぐまれ、折にふれて、その才能が発揮された。だが、彼の言葉は時流にさからい、彼の行動は俗物ともとはちがっており、生前にはおのれの志すところを、充分に発揮できずに終った。だが、彼の学問は、死後に世にみとめられるところとなった。時流に乗じて出世したところで、その著作さえ、うたかたのように消えさり、その人の名も忘れ去られてしまふといった者とくらべて、はたして、いずれが立派であるうか。」

曲学阿世という言葉がある。吉田フンマンの創作ではなく、昔からあったのである。昔から、この言葉があつたということば、昔から、操も節もあらばこそ、おのれの栄達のため、又け、地

位の維持のため、乃至は自分のいくじなさのため、こんなことをしてきたヤカラのおったことを物語っている。私たち、医学の世界をみただけで、そんな手合はころがっていて、例をさがすに骨はおれめ、もつとも、曲学阿世といえるほど学のあるやつなら、まだ面白いが、最近になるともつとひどい。何でも患者のいうがまま、お説ごもつともと、尻尾をふるのまである。素人に尻尾をふるのなら、もはやそれは曲学阿世というよりも、無定見というべきであり阿諛道従がふさわしい。もつとも、お役所というところは、こうしたフヌケが出世するシクミになつて、おのれの信ずる所を、買めこうとすれば、煙たがられるか、おんだされるのがオチである。らしいために身を捧げて、なんとすがすがしく生きぬいてきた人の、末路はすべて不幸であった。だが、このせはすべて虚仮である、かわらぬものはただひとつ、魂によつて創造したものだけなのだ。時流とか、出世とか、名譽なんてものは、孤独の魂の創造と、向のかわりもない。

「白谷の實の名は幹、よび名は礼宗、通称は源藏である。備前虫明の人である。」
に、科源藏が本名だが、彼が儒者だった關係で、中国風にこう書かれていた。白谷という号の他に、雙峰老人とか山林之儒の号も用いている。また、白谷が二十五歳のときに出版した「三備詩選」では、彼は四方の号を用い、中国風に四方と、すこし気どっているのもおもしろい。二十代では、まだ、白谷の号は用いていなかったのである。白谷が倉敷で生まれた、という説があるが、私は、それをとらない。ここで、虫明の人であることがはっきりしている。父の仁科琴浦が、虫明の人であるならば、白谷が倉敷で生まれても、墓碑では、虫明の人と書かれる可能性はのこる、というのには、その人がどこの人だと刻む場合、その地名は、現代風にいう本籍地を用い

るのが常だからである。しかし、前回、私がすこしふれたように、仁科琴浦が虫明の人だとする根拠は殆どない。岡山の人だと考えられる根拠を、私は沢山もっている。琴浦の詩そのものが第一、それをものがたっている。琴浦が岡山の人であるならば、仁科白谷が、虫明で生まれていなければ、墨碑に「虫明の人」とは書かれるはずはない。「三浦詩選」をみよう。

仁科貞 字正夫、号琴浦、岡山人。

納尚堅 字美好、号玉嶺、虫明人。

松尾豊 字秀表、号大嶺、虫明人。

釈運俊 字富英、住虫明興禪寺。

仁科正 字好古、号藤川、琴浦子。

田中意庵 号東谿、虫明人。

上森茂 字木公、号坦齋、虫明人。

中条俊潔 号黒井、虫明人。

まだまだ虫明關係の詩人が多いが、琴浦と磔川以外は、すべて、虫明人とされている。それに及し、琴浦は、岡山人と明記されているのである。琴浦が、虫明の人なら、息子の白谷が、わざわざ「岡山人」と書くわけがないのだ。琴浦が岡山の人であるなら、白谷が虫明で生まれなければ、このように、「虫明の人」とされる可能性はない。琴浦があらぬ疑いをかけられ、獄に入れられていたときも、琴浦の詩によれば、彼に情をよせ、梅の花などをさし入れた友人もいたのである。そのような、琴浦の無実を信する伊木家の家臣の事情によつて、琴浦は虫明に浪々の日々

すごしており、そして、白谷が生まれたという可能性はきわめて高い。白谷の号は、由明の白谷（へしらたに）に由来する。

私の家は虫明で、
きこりが隣に住んでいる。

一本の梅の木があるが

古木のためか花まげら。

年の瀬せまり、帰りました。

帰って古人の書を読もう。

「朗浦」と題した彼の詩をみても、彼の家が白谷にあったと考えるのが自然なようだ。いま、白谷には「白谷先生旧埵地」の碑がたてられている。昭和九年ころ、由明の青年たちが、道路工事に参加して費用をたくわえ、その碑をたてたのである。仁科白谷の旧宅のあとには、当時まだ方形の土盛りがのこっていたという。白谷が没して、まだ百二十年あまりしかならない。大郡市ならいざ知らず、この虫明で、その旧趾がまちがえられることはありえない。仁科白谷は、寛政三年（一七九一）に虫明で生まれた。父、仁科琴浦の三十六歳のときの子である。琴浦にと、て、白谷は三番目の子であった。えとでいえば、彼は「ぬし、つまり「いのしし」の年である。伊木家は、八代忠福の四十四歳の年である。

仁科白谷の生誕にちなみ、白谷に遊んでみよう。円通山興禪寺の権の道を、そのまま谷にそってつめてゆくと、やがて、道は三つに分れる。北方の道は、白谷へ通ずる。由明の詩人、松尾大

頌は、「三備詩箋」に「白谷に遊ぶ」という詩をのこしている。

老松にかづら茂りてひろくらく

峰にけわしき道ひとつ

谷川うわわきらめきて

滝は雲よりたぎちおつ

たどりこし白谷は夕つ方

谷に紅白の梅におい

翁は柴に花さしになう

鷄も犬も雲よりきこえ

里人の心はおくけかし

ちまたへ帰るときのきて

老いぬればここに住まんと思う

いまも、白谷に来ると、この詩の情景が、そのままひろがっている。つつじをめで、わらびを

つものによい。羊歯の美しさに、あなながたけ、おどろくにちがいない。白谷の丸は坂田。ここ

は梅林で有名。昔は、白谷にも梅が多かったという。に村白谷の家の老梅も、その一本であった

のだろう。黒井山等覚寺は白谷のすぐ西である。黒井の晩鐘は、ここでは手にとるよういきこえ

る。虫明の東のはすれの折浜も、この白谷をとお、てゆく。静かな明るい部落である。海とはこ

く近い所であるのに、ここには深山幽谷の趣がある。江戸時代、ここには、伊木家の建碩蔵があ

った。今も地名として、その名はのこっている。

「生まれつき 豪放磊落な人で 気性はけしなかった。」

琴浦の血は やりり白谷にも流れていたのである。しかし、オンバヒカサで育てられれば、強烈な気性もやわらげられる。極度のうちに育った白谷なればこそ、更にけししい気性となったのである。後年、白谷の気性について、面白い話のこっている。猪飼敬所が 川村という人にあてた手紙の中で、こんなことを書いているのである。

に科白谷の気性についての御批評、まことにそのとおりです。昨手の冬、寧慮松南が言います。「白谷はこのごろ、人をのしりますので、人は白谷を避けております。私は、彼に注意しようと思いましたが、先生も、ひとつ白谷に注意してやっってください。」そこで、私は、白谷がやって来ましたとき、松南の言葉をたえ、また、注意しました。白谷は、にこにこして、「私はまた、いつも松南に、もっと気節をもと、注意しております。彼と私とをつきませましたなら、ころあいの人間が二人できましよう。」と申しました。京都における詩人として、松南はその筆頭にあけられておりますが、私は白谷の方につよくひかれております。

そのほか、猪飼敬所の手紙の多くに、に科白谷は登場するが、京都でも、相当のあはれんぼうであったことは、まちがいない。これらは、追々、紹介しよう。

「読書を好んだが、註釈や修辭の学業などはしなかつたのである。」

今にはじまったことではないが、「趣味は読書」などという俗物があとをたため。ケイリンやマージャンに、うつつをぬかす手合でも、趣味は読書といえはきこえがよいのだらうか。しかし、当時の読書は、今日のような印刷物氾濫の時代とは、わけがちがう。週刊誌や、くだらめエロ雑誌をよんで、趣味読書とすましてはおれぬ時代なのである。つらく苦しい仕事として、読書があったのである。白谷は、コツコツと本の由になつて、つみかさねるという氣質ではなく、本を直感的に把握するタイプであつたらしい。そして、むしろ、エスアリの人であつたといふよう。ふたたび、猪飼崙所が谷という人にあつた手紙から、その間の事情をみつめたい。白谷の鋭さは、同時に、彼の欠点としてとらえられているのである。

京都の儒者についておたすね下さいましたが、このようなおたすねには、困つております。知りませんと申せばうそになります。ありのまま申しますと、先輩としての言葉にはなりません。京都の儒者で、ほめそやされている人は、みな文人才子で、太田錦城が申しました、うわついた詩や、つまらぬ文にうつつをぬかしているたくいで、經書の學問などを共に語るべき者もひとりもおりません。およそ、京都、江戸、浪華の儒者は、世説、家本、唐詩選などの講義をやり、うわついた詩文を作り、身すぎせすぎをしてゐる者にすぎません。二十年前、松本愚山は、みんなの前で、京都の儒者は、自分をはじめ、みんな虚名のやからにすぎず、ただ猪飼ひとりか実学であると申しました。太田錦城も、京都の儒者は、猪飼ただ一人だと申しております。そして、他のものけ、小児だと言いました。私がこんなことを申しますと、自慢にきこえますが、實際はそうなのです。松本愚山や頼山陽などは、平素、門人

が何が経義をたすねますと、わしは詩文が専門だ、こんなむづかしいことは、敬所にたすねろと言うとか。寧ろ松岡やに科白谷らも私を尊敬しておりますだけで、まだ一度も経義をたすねたことさえありません。私なりに見ますと、頼山陽も二十代の頃は読書につとめましたが、その後、詩や文が相応にできますと、あとは諸国をめぐり、机にもかゝて書を読むことはありません。に科白谷なども、またそうです。ヤチは、みな勉強しません。私の門人は、大抵、詩文の才がなく、経義を志しております。その中には、詩文の才のある人もおります。実学に志す人の多くは、学才がなく、学才のある人は、不まじめです。それで、私のすべてをゆすねる弟子がありません。これが私の悲しみなのです。

猪飼敬所にかかると、当時の儒者はケチヨンケチヨンである。しかし、この中に、読書の業しさが充分くみとれると思う。たとい、ここで、こきおろされていても、に科白谷が、他の著名な儒者と共にひきあいに出されていることは、白谷が当時、京都では五指のうちに数えられる儒者であったことを、逆に証明している。だからこそ、敬所にや、つけられているのである。「ひとたび詩情がわくと、心のままに言葉をつくり、たちどころに、おびただしい詩が生まれた。そして、すでに人の手になった言葉をまわることなど、一度もなかつたのである。」「エスアリとかポエジー」というものは、本を讀んだから、年を取つたから得られるというものではない。それは本来、天賦の才能である。だが多くの基礎的なメトリックが確立されていなければ、作品となって、詩は筆をひらかない。猪飼敬所が、自分の門人について、なげきを深くしたように、詩文の才は努力だけでは得られないのだ。詩人が詩を作るのだなどと考えるのは、まち

がいた。実は詩が詩人をつくるのである。詩の世界が、詩人にゆだねるものが、詩なのである。人間にゆだねた詩が、地上から、どのようにかそやかな、すみとおるしびきを傳へて帰ってくるかを、詩の世界はまわっているのだ。思ったままを文字にすれば、すぐれた詩となり、文となるのだという、ひどいあやまりが、教育者や詩人や歌人の間につたえられている。なまくら頭をしぼったところで、何で詩などが濁くものだらうか。下手くそな詩や歌や俳句をこねるやつほど、おのれの無能を知ることはない。無能を知らないために、わかち書きの文字を、三十一字を、十七字を、詩歌や俳句と思ひこむのか。恥ずることなく、短冊にそれらをめたくって、衆人の前にひけらかすという滑稽を演ずる。白谷は、天賦の才を得、自在に詩を作りだした。そして、彼独自の詩境をひらいたわけである。父、琴浦の中の、ついに花ひらくことなく終った詩魂が、子の白谷の才を得て、ついに存分に開花したのだ。

「壮年に及び、なき父の学をしい、何れも手紙をよせ、江戸へ来て塾に入った。」

仁科白谷の学問について、私自身、くわしいことは知らないが、少くとも、幼少のころから父の琴浦の薰陶をうけたことだけは、まちがいはなからう。とすれば、彼の若い日の学風は、当然、折衷派であり、しかも、老莊を尊んだことは推測できる。琴浦は、死にさきだつ一年前、「老子解」を出版したが、ときに白谷二十三歳であった。その頃すでに、白谷は、学問もかなり深くその上、詩才はみがかれていたことは、「三編詩選」の序文をみても明らかである。晩年の琴浦は、二十代の白谷に、何かと相談をし、息子の言葉に耳を傾けていたのである。心に大志を抱きながら、身のおとろえには勝てず、詩選の仕事も、備前、備中、備後にかぎって、こつこつと琴

浦は、晩年の日を送りこしていた。そして 文化十一年 五十九歳で琴浦は没した。遺品の中に未完の詩選があった。白谷は、父の遺志をついで、二十四歳の若さで、ついに「三備詩選」を完成し 翌年 上梓して世に送った。もつとも、この「三備詩選」の中の作品は、いいものばかりともいえず まあ今日風にみれば「ホトトギス雑詠集」といった程度のものでしかない。虫明の文人たちの作品も 沢山めかれている。ともあれ、このような若さで、白谷は 詩文の才にめぐまれ 三備の詩客の注目する所となっていたのである。白谷が、いつ江戸へ出て、龜田鵬斎の門に入ったかは、明らかではないが、壯年という言葉からおして、三十歳前後の頃であるうと思え、父の友人であった鵬斎は 江戸下谷金杉中村にいたが、白谷はその門をくぐったのである。森政外の「北条露亭」を誂んだ人は、北条露亭が白谷と同門であることがわかるだろう。白谷の「九友詩」に、露亭の作品もあげられている。当時 鵬斎はすでに七十歳で、最晩年の頃である。養子の龜田鈴瀬は、白谷よりも十三歳年長で 油ののりきった時代である。すべての人が、白谷を鵬斎の門人としている点からみれば、白谷は鵬斎門下にあつても、光った存在であつた。学風は当然 井上金峨から鵬斎へと伝えられた折衷学である。白谷は「白谷子の歌」の中で

その学ぶところは

孔子の老子か

白谷子自身とんとわかり申さぬ。

白谷子 腹をなでるばかりでござる。

どうた、っているが 鵬斎ゆずりの大きい学風と それをうけた彼自身の気懐が、そこにはある。

文政五年に おそらく 鵬斎の古稀を祝しての企画であろうが 「鵬斎先生詩鈔」が上持された。そのとき、白谷は、堂々たる序文をこれにのせ、彼自身、その出版の中心的役割を担っていたことがわかる。ときに白谷は三十二歳。鵬斎門下の後足の多い中であって、若い彼の活躍ぶりをしのばせる。鵬斎の書は、まことに立派だが、白谷の筆跡には、多分に鵬斎の影響がみられる。白谷の、鵬斎への傾倒ぶりがしのばれる。白谷の「鵬斎先生に贈る」詩をみよう。

大海の東なる大きい土くれ口、

これを日本と名づけ候。

東西さしわたし三万里、

南北はとんとわかり申さぬ。

五穀は雲のように湧き、

珠玉は山をなしおり候。

さてもわが鵬斎先生といっば

日東の仙人にてござる。

青雲の口て あかわさす雲の辺に遊び

眼は紫をなすいなびかり、

舌はとどろくいかづちにて、

歌うたいはた酒くらい、

朝に松が枝のみどりをあつめ、

笑つて指さす富士の山。

われはもと玉皇の香祭ま

いま仙人の弟子となり、

大還の法を学びおひ候。

仙人は大還の処方を授けられ

まのあたり神々つとい候。

無念や世には才鬼多く、

頑仙ども登天をのぞみ居り候。

才鬼頑仙まことうるさきことながら

こやつらおのれこそ本物とめかしおる。

いや情乃やの悲しやなど、

仙人どもになげき参らせ候。

のうのう日本は大きくとも

足をのけすにちと狭うござろうえ

五穀は雲ほど湧こうとも、

腹のたしにけちと足り申さめによつて、

大きい嵐の来るをまち

天に翼をふらばや、のうと言う我に、

仙人しずかに申された。

もうろくじじいのわがのぞみ

ただ、うまき酒くらうのみ。

ここに静かな晩年の鵬斎の姿があり、曲学阿世の徒に対する白谷のはげしい憤りがみられるではないか。

「晩年には、京都に住み、当時の名士と広く交際した。彼の家にはまた湖山があり、白谷の詩情を助けた。日に日に學問に精勵し、何らはたらきかけることなく、人々は白谷の學風になびいた。「凌雲集」という彼の詩集は、風流人士にもてはやされた。全国に白谷の名声が高まり、弟子となって教えるこゝものぐしきも切らなかつた。」

白谷が、京都に居をかまえたのは、文政九年（一八二六）といわれている。白谷三十六歳の年で、この年に、師の鵬斎は七十五の天寿を全うした。白谷は、江戸遊學ののち、ただちに京都へ来て、そこに住んだのではないと思われる。猪飼敬所の「白谷詩文抄」の序をみると、白谷は、諸國を遍歴しており、播州高砂における彼の逗留は、彼の生涯に一つの奇縁をつくり、彼は、再びその地にいたって、その地で没し、そこに埋められるのである。高砂から、白谷は京都にいたり、三十代で居をかまえる。京都における白谷の住所は、眞尋が寮のあたりといわれているから、ちようど八坂の塔の近くである。京都で、彼が最も尊敬した友人は、猪飼敬所であり、最も親しく交際した友は、摩島松南であった。猪飼敬所は白谷より二十年長であり、摩島松南は、白谷と同一年であった。猪飼敬所は、巖垣龜溪の門下で、西陣で教授していた。摩島松南は、若槻義高

と猪飼敬所に学をうけた。仁科白谷は 京都にいても、相かわらずの気性を存分に發揮し、よく勉強し、いい詩を作りはしたが、同時に、横紙やぶりをや、ては、敬所や松南を困らせもしたようである。そうしたエピソードの二三を、敬所の手紙から眺めてみよう。

うるう月の二十五日に、白谷が見玉三郎と共に、寒氣見舞に來ました。その頃は、私はまだ病気ではなく、酒を出しました。白谷は 酔った勢で 松南の宅へけきましたところ、松南はそのとき、近所の堤とかいう人の家に招かれていて不在でした。白谷はあとを追って、その家へゆきましたが、梅辻春樵も来ておりました。梅辻はちかごろ 他家へ行っても、数珠を手にして念仏をいたしますが、白谷は「儒者のすることではない」となじりました。梅辻が「儒小、仏大」だから念仏をする」と答えましたところ、白谷は血相すさまじく、声あららかに「あなたが 周孔の道を学びつくした後、儒教は小、仏教は大というのはいい。詩文はうまいか知らんが、周公の道もろくろくきわめずに、何たることを言う」ときびしくせめつけ、梅辻は閉口してしまいました。松南は「まああととりなしをし、白谷に「道ハ同ジカラズ云々」といふこともあるじゃないか」などと言つて、その座はまあまあとケリがつきました。晦日に私が白谷の家へ参りますと、白谷が、松南に与うる書というものの原稿を私に見せました。そして「梅辻も儒者です。だから私は注意しました。松南は 梅辻とけ無二の友です。しかるに一言も注意をしないのは、けしからんことです。」と言います。原稿は、二千言にも及ぶもので、儒仏の理を論じ、すさまじい議論です。白谷は私に添削をたのみました。私は、どうもわすらわしく、それに何らつけくわえませんでした。そして、白谷

の言わんとする所は、正しいし、松南の弱点をついているから、そのまま彼にわたすがよいといいました。その書を、白谷が松南にわたしたかどうか、また松南がどう答えたかは知りません。白谷と梅辻とが争論したこと、同席の人もあって、世間にとりざたされております。招かれもせめ家へおしかけ、その家の客に争論をふっかけるあたり、白谷らしい。しかしまだこの方はよいが、次の話となると、相当すごくなる。敬所の手紙をみよう。

頼山陽は京都におりますが、私は彼とは十九年前と十一年前に、丹山や他の詩会の席であっただけです。今度、私の弄筆を、仁科白谷が首領とりで、万事とりしきってやってくれています。白谷と頼とは、先年、姫路で争論したことがあり、互に憎みあっております。佐伯の儒臣の中島増多が、去年の夏から勉強に来ておりますが、侍ですが詩文もうまく、江戸の昌平塾にも数年いたことがあります。江戸でも有名なキ子です。この中島が、頼も白谷もしたしいところから、仁科から中島に、私の寿習の文をすすめさせたところ、頼も、平素から私を尊敬してくれていますので、よろこんで、羽二重に文をしたため、当日出席のつもりでした。ところが少しわけがあって、頼山陽は欠席し、文章だけをどけて来ました。その文に、私のことを翁とよんでいることは、不遜である、白谷はすごく怒り、手紙でなじってやらねば、と言います。すると他の者も、山陽の文章の、ちよ、としたアラをさがしたり、まるで冗談じゃないかといったり、こんな文章は、記念文集にのせるべきじゃないと言いだす始末です。頼山陽が折角好意的に出してくれた文章を、何だかだとはすかしめるのは、私にはしのびないことでした。また、私のことを翁と書いたものは、詩文には二人、和歌には三人

あり、頼一人ではありません。山陽が私のことを述べているのに、実意があります。虚美の文ではありません。文集の序に中島が、平安山水の秀麗は、私に集ったなどと、歯のうくようなことを書いています。とても読めたものではありません。そのほか多くは、自分の學識をほこり、過分のおつしよを書いておられます。頼は、翁とよんでいても、その文は、私の氣にいらしてあります。しかし、仁科はじめみな言いつ分を止めることもむづかしく、私は、先月六日、頼をたすねました。そして、頼山陽の文章のわすかなキズを指摘し、みながこれこれいうので、翁を先生と書きなおしてほしいと言いましたところ、彼は、御指摘の所は書きなおしますが、文体からみて翁とした方がふさわしく、頼は先生と書くべきところ、翁が小さくて、こんなことになりましたが、書きあらためますと、いつてくれましたが、初の文とは、所々、増減があります。

手紙はまだ続くが、これくらいにしよう。仁科白谷が、頼山陽にかみついたのである。しかも、敬所の手紙によれば、すでに、姫路でこの二人はケンカをしていたのである。頼山陽はともかく、仁科白谷が一番ケムたい存在であつたようである。

白谷の著作は「凌雲集」だけでない。「三編詩選」「明浦吟稿」「嵐山風雅集」「梅山吟稿」「高太史詩鈔」「十九友詩」「聖賢君子狂夫詩」「白谷詩文鈔」「芙蓉百律」「詩論」「經論」「交友錄」「北遊行」「暁野漫筆」「西遊日録」「孝經纂註」「論語纂註」など、枚挙にいとまがないほどである。天保九年（一八三八）、白谷四十八歳のときに、老中の水野忠邦にむかえられた。だが、彼はそれをことわって、生涯、野に在つてすごした。彼は、諸国を遍歴し、詩を作

ったのしんだ。彼の「芙蓉百律」は、富士山に対する彼の百首の詩を集めたもので、彼の行かには、こんな壮筆はない。北斎の富士山の絵は有名だが、同じ頃の白谷の詩は、あまり人に知られていない。

「弘化きのとみの年の夏五月に、播磨の鈴木正智の家に逗留し、廿九日に、にわかには中風で逝去した。享年は五十五、印南郡今市浦の正覚寺に葬った。寺は鈴木家の菩提寺である。」
弘化二年（一八四五）、門弟の巡講を思いたった白谷は、丹波、丹後、但馬から美作へぬけ、備前をめぐり、播磨に入り、今の高砂の近く、今市の鈴木長左衛門の家に滞在した。この人も、白谷の弟子であった。そして、突然逝去した。白谷もまた、父の琴浦と同じく、自分の家で死ねなかった。そして自分の故郷へ葬られることもなかった。

「もしも白谷が、生来の豪放な気性をまけて、すすんで俗物どしに自己をうりこみさえすれば、たちまち有名人として、もてはやされたであらうに。」

なぜ、亀田綾瀬が、このように書いたのであるか。おそらく、当時、まことに人づきあいのいい、そして自分を売りこむことにだけた有名人があったからであらう。とすると、その有名人は、頼山陽を暗示していると考えるのが、最も自然である。

「妻は石川家の出で、大阪の人である。若くしてなくなった。」

白谷の妻について、私には、殆ど何の手がかりもない。子供もなく、淋しく早く死んでいったのである。白谷の詩「歳暮」に、そのわびしいおもかげのこざれている。

歳の暮とて何ぞかなさん、

時の流れをつなぐよしなし、
いたすら道を求むる者は、

書をひもときてさんばらの髪。

會しき妻は病に臥して、

金なしといひすすりなく。

きかめふりしてともしびかかけ、

われは読みゆく聖のことば。

白谷のさわやかな生涯のかけに、貧しく、名もなく、若いまま死んでい、た彼の妻の存在を私
たろは忘れてはならない。琴浦の妻もドン底生活の江戸で死んだ。だが、彼女にはまだしも、三
人の子があった。そして、白谷という立派な子が、世に名をあげた。白谷の妻は、ひとり淋しく
死んでしまったのだ。このひ、そりと生涯を同じた一女性を無視しては、白谷を語ることはでき
ない。

「いまここに 嘉永かのとみの歳、白谷の七回忌にあたり 友人の加藤維熊と香川篤、それ
に門人の鈴木正智と菅原敬が相談し、力をあわせ 石にキザミ、白谷の墓とすることにした。
その銘は

いろはにおえどちりめるを、

ほろぶることなきたかき名ぞ、

ある本では、この銘は、

「かばねも土となりぬれば、
なべてむなしくなりゆくも、

すぐれひいでしたましの

ほるぶることのあらざらん。」

となつてゐる。白谷の墓碑銘は、この龜田綾瀬の撰にかゝるもの他に、白谷の友人でもあり弟子でもあった、建仁寺の勤王僧の天章が撰したものがある。そしてこの二つの墓碑銘は、ともに白谷の墓にきざまれることになつた。奇しくも、琴浦と白谷のに科父子は、ともにすぐれた墓碑銘が作られたにもかかわらず、ともにその墓にきざまれることはなかつたのである。

虫明にも、仁和寺白谷が住んでいたことは「明浦吟稿」によせられた、綾瀬の序文によつても明らかである。

「詩国通歴ののち 諸想もみちたりた白谷は 再び脩前にかえり、家を虫明にかまえて住んだ。彼の家は、東ははるか遠くに、須磨 明石、淡路の名勝がのぞまれる美しい場所であった。空の青さ、海のががやきは 彼をより高きものに悟入させ、ただちに詩となり、中国の偉大な詩人にたぐうべき絶唱がうまれた。」

といふ意味の漢文なのである。白谷の家が白谷へしうたににあつたことは、またしかである。彼は、ふるさとの虫明に帰つて ひとり空をかける鶴をみた。

ふるさどにかえれば ああ山の色

古い松の林もなつかしきかな。

われも老いたり、いくとせの別れなりし
ともしびがかけて、この夜の心。

思いあまつて、言葉少く

よるこびきわまつて深きかなしみ。

いうなかれ、人の世は夢と

夢よ魂よ、たすめべくもなし。

虫明の南、西の方から岬がつきでているのが牛窓である。その牛窓には 未完のままの父の墓があるのだ。はかなく妻も死んだ。孤独の白谷に、虫明の風物はやさしかった。そうしたある日、はからずも 白谷は、納玉嶺と逢ったのである。虫明の秋の道であった。

ゆくりなく頬をあわせてかたみに知らず、

はやあい別れてより二十年あまり、

つらつらみつめて君なるを知り

ともに語りてこみあぐるもの

竹につめたき雨ふりしきり、

村のともしびまばらにけらぐ。

わがうきくさをなげくをやめよ

なげなげれて詩をうたうのみ。

二十代の白谷は「三備詩選」の中でも、すでに玉嶺の作品を収録したが、「十九夜詩」の中で

も 当時、そうそうたる詩友の中に、この玉嶺の詩二首をあげたのである。上森坦齋はじめ多くの詩友が虫明にいた。備後の菅茶山 倉敷の岡鶴汀 赤穂の入江竹軒などと、近国にも詩友はいた。だが、虫明では、やはりこの納玉嶺とは、とりわけ親しかつたのである。

納玉嶺は、藤九郎尚堅といい、納五郎右衛門尚平の子である。安永五年（一七七六）に生まれた。白谷より十五歳年長である。玉嶺は、目が大きく、鼻すじがどおりで、ぶり太った人であった。礼儀正しく、漢詩を愛してやまなかつた。はじめ、岡山の伊木本郎にあって、近習として仕えたが、病氣を幸い、虫明に帰り、虫明の生活をたのしんで、岡山へ出ようとはしなかつた。虫明の時間的にゆとりのある生活の中で、彼は、中条家からとついで来た妻の奇美や、息子の尚恒と尚易と、それに娘の登美の四人で、昼も夜も、漢詩を朗詠してすごした。娘の登美が、四、五歳で詩をそらんじたのも、そうした家だったからである。玉嶺の詩は、すこぶる雅致にとんだもので、ことに、白谷の賞揚するところとなつたが、また、こんな話もある。頼山陽が片上に宿泊したとき、たまたまその宿で、画に題して作った玉嶺の詩をみつけ、ひどく気に入つて、くりかえし口ずさんだ。そして山陽自身、一首の詩をものして、玉嶺に贈るべく、宿の亭主にことづけたのである。白谷が

兄は父の才能をうけつぎ、弟は父の人柄をうけついで、納玉嶺は、いい息子をもらったものだ。

とたたえたように、玉嶺の二人の息子も、詩人であった。長男の五郎右衛門尚恒は、迫門と号し、家をついで、百八十石、虫明宗門奉行となつた。次男の尚易は大道と号し、小岸家の養子となり

八百七十石をついだ。玉嶺にすぐれた詩は多いが、「幽居」と題してうたったものに、
うぎ世の道はけわしくて

かくれすむこそわが頼い

山のおもむき知らんとて

ひとりわけいる山のうち

がある。彼はその詩のように、平士隠居として、詩をたのしみ、七十九歳まで生きた。彼の妻の
奇美は

わだつみに日はくれてわたるかりがわ

かなしき声々は空のはてに消えゆき

わすか来し旅にも赤情は深し

わが家ほかの雪かかると玉嶺山の東

と、女ながらいい詩をよんでいる。このように、一家をあげて漢詩を愛する納家は、当然、詩
魂けたかなに科白谷と、深いまじわりをもつようになった。白谷にあるに科白谷の家を、納玉嶺
や息子たちが訪れることもあった。また、白谷も、人恋しいときには、虫明の玉嶺の宅を訪ねた
であらう。

ある夜、雪がつもった。虫明に雪がつもるのは、全く珍らしい。その夜、玉嶺の次男の尚易は、
酒をさげて白谷を開居におとすれたのであった。

酒をたすさえ来りてわれとのも

この雲の夜の寒きを忘れぬ

君にむくける他物なし

梅の梢にかかれる月を見しむ

その夜のことを 白谷はこううたった。斗酒なお辞せずという白谷にとって、その夜は殊にうれしかった。そのお礼にといって、窓の月が老梅の梢にかかっているのを見てもらう以外に、何も無い清貧ぶりなのである。この詩は、「白谷詩文鈔」には「雪夜納大道見訪」として収録されている。私は、奇しくも、に科白谷の書いたこの詩の軸を、所蔵することができた。「雪夜納某見訪」と、それには題されている。白谷のこの書をかけ、私は、百二十年前の虫明に、こんな静かな夜があったことを思うと、深い感動がよびおこされるのである。虫明の人、に科白谷は京都に住んだ。京都で生まれ、そこで育った私が、いま虫明に住んでいることも、白谷と私とを強くむすびつける奇縁でもあるうか。

（「楓」 三一三号、昭和四一年一月一日発行）

葬
る

原
田
慶

よこれた水の上に
白い腹をうかべ
投げ出された手足は
もうなにも受けとめない

まよいこんだおまえを

どこへつれてゆけばよかつたのか
おまえに必要なのは水だけではなかつたのだろうか

深い排水路の底で
おまえは聞いています

消えてゆく水音を

公園には

砂を積んでいることもと

そばに立って泣くことも

からっぽの遊具たち

もうどれくらい

雨は降らないだろう

おまえをつれてきた小さな袋が

わたしの手の中で

ひからびる

六月はおまえを育て

そして

葬ったのだ

時が音をたてると

突然

わたしたちはけしきはなされる

おまえは再びすべてのかわりを断ったのだ

公園では

二人のこどもが寄りあって

あたらしい砂山を造ろうとしている

川

川は一瞬ふりむいて
走り去った

だけれども聞きおぼえているような

メソソフランノが

遠い国からのように

水を這う

わたしたちを過ぎていった人々が

多くのできごとを折れたんで

うたいながら流れてゆく

完成したあなたたちに

どうしてわすらいがあるうか

すべては明らかなのだから

しかし

あなたたちは悔いていないだろうか

若かったははよ

あなたのことほもうおとなになる

手を伸ばたままであなたは

こともちちから去ったのだが

これでよかった

とあなたは思っているだろうか

それとも

あなたを思っているのは

わたしたちなのか

すべてを完成してしまほんとうに

あなた自身なのだとしたら

どうしてわたしたちは

あなたを忘れないのだろう

あまりにも早くあなたは去った

そのように

あなたたちは

ほほ文みながら流れてゆく

人々のかなしみは

ナルビヤ

すべてあなたたちにはじまり
そしてまた帰ってゆくのだ

川は知っているにちがいない

だから黙って

流れてゆく

わたしたちがいつか知らねばならないことを
けっして話そうとはせずに

ナルビヤが

小さな火をつけた

がっしりと

夏をたえめいた腕にささえられ

赤いふさは

しずかに燃えはじめる

おまえに

ためらいはない
つめたい炎であたりをこがし
無言のさけびに
火花をちらす

なにもものにもたよらない
あまえのきびしさは
底めけに明るく
人々をあまやかさない
その強烈な愛を
空に向かつてうたいあげる

秋のみのりはちかく
荘厳ミサはひびきはじめた
空がもっとも彼自身であるとき
あまえは
いっそうたかく燃えあがる

ぼつんとはなれて
ひとりしゃべっているのはだけ
みどりのボールが葉群から
とび出して
ツタの網にひっかかり
太陽は雲をゆかせて
なにげない顔を出す

穴のあいた
バケツをさげて
泥の中から雑草の芽をついばむのは
未明の森をゆり起こし
自分だけのことばで話しはじめるのは
しっぽのとがった
黒い鳥

雪溶けの墓地で
人々のかかわらない

武

器

幾粒かの木の実を見つけようとするように
注意深く泥をけね
それだけでしあわせそうに
帰ってゆく

バケツの底でひからびるのは

泥まみれの毛根

甘い木の表が

のどをくぐることはなくとも

おまえけ泥をけねる

ただその時間だけが

自分のものであるかのように

わたしはどれだけの多すぎるものを
あなたから得ようとしたらうか
何受いじわるく
つめたい腕を首にまわしてみたらうか

1968 2.20

そのたびに
あなたはどのような武器を使うこともしなかった

子守歌

鍵盤を走る指先

人々がそのためにわらい出してしまふ

ふざけた剣の舞さえもまおうとほしなかった

そして

遠い夜の底で傷ついていた

わたしが知っているのにあなたが

気づかないことがあっただろうか

傷口をおしひろげては

孤独な母親のように大仰に抱擁するのだった

もしも

あなたがもっともよくえらんだ

または手あたりしだいの武器をふりがざしたとしたら

どれほどもくろしますにおわってしまったのに

あなたは武器をえらばなかった

それよりかなしい武器がほかにあったらどうか

男

永遠に人々をつなぎとめる淵のようにな、むく
だれもが振り返ろうとしないところで
あなたは立ち続ける

1967.5.24

男は

地下鉄の底で
すいがらを掃きとることぞ
仕事にした

彼のマスクは小さすぎて
鼻の先にしゃがみこむ

軌道は広く
土と枕木は黄色い

彼はたえず
すりへった篇をこすりつけて

少女

すいがらをひろった

だまってひろうことは
たやすかったの
安い賃金が支払われる

男は

人々を見上げたりしないで
歩くことになれた

そのため

地下鉄は彼のものだろうか
ふと人々に
思わせたりするのだが

噴水は虹の下から黄色いしぶきをおしあげている。公園で画家は大きな
キャンバスに描こうとしていた。

1967 3.4

「ごらんなさい 船が沈んでいくところですよ！」

彼は突然さげほ出して わたしをおどろかした。

チェーリップはみんな咲きそろって彼のゆびです方に燃えていた。

「あなたは 赤いチェーリップがすきですか。」

わたしは彼の方へ歩きながらたずねた。

「ああ みどり色のボートが、去年の夏見えなくなって帰って来ないので
す。」

「あなた チェーリップですよ、ボートなど見えません。」

「夏のおわりに、みどり色のフェールへ行きました。それは風の吹く日で

パラソルは 空のむこうへ飛んで行きました。」

「フェールだなんて あなた。」

「人々のからだは つめたくて、泳ごうとするには 勇気がいりました。

人々はどんどん帰り仕度を始め、電車は山あいをまがって すぐ見えなく

なりました。みんな帰ってしまったと風はいよいよぼうぼうと吹きました。

でも少女が一人だけ 広いフェールを泳ぎまわっていたのです。赤い水着、

それは太陽だったのかも知りません。」

「でもあなた……それで？」

「チェーリップは太陽の鏡、少女はみどり色のボートに乗ってやって来ま

チューリップ

す。絵具をといっておかなければなりません。」
「それで、泳いだのですか。」

「人々のおいていったコーラのびんを、糸につりさげて、風のオルゴールをつくるのです。でも今日は、オルゴールが聞えるでしょう。少女は、みどり色のボートに乗ってやって来ます。わたしは絵具をとかなければなりません。」

彼のパレットには赤と緑がつみあげられた。

わたしは、いつか、山あいのフルヘ行ってみようと考えながら、太陽を見あげた。その時、チューリップのむこうで、一人の少女が手を振るのを見た。

1967. 4. 20

出かけに、サヨが「お花を買って来てくださいまし。」という。こう、丁寧に、ものを云ったことがないので、わたしはおどろいたが、彼女がまじっているの、変な気分になって出かけた。

夕方、家に帰ると、「あなた、お花はどうでした。」という。すっかり忘れていたので、「あすは買ってこよう。」という。と、「そうですか。」と、いって眉ひとつ動かさない。朝と同じ顔なのでまた気味がわるくなった。飯に

しようというど、「もうできております。」と先に立つ。台所へ行ってみると、チャーリッパの花びらが、皿にのっていた。仕方なく茶を一杯のんで書斎に入った。

翌朝、またチャーリッパではかなわないので、学校の食堂で朝飯を食うことにして、出かけようとするど、サヨは、「あなた、花を買って来てくださいまし。」という。「ああ。」といって、彼女の頬を見ないで出かけた。まゆは触角になり、唇が伸びてくるくとまいてるのではないか、とおもった。

学校が終ると、他にゆく所もないので、近所の花屋でチャーリッパを買ってパン屋に寄って帰った。戸を開けると、サヨは、ずっとまえから帰りを待っていたものらしく、上り口にちょこんと空っていた。「花を買って来たよ。」というど、「ありがと。」と花を受けとり、歩いているというより、ふわふわかんでいるようなぐあいだ二階へ上ってゆく、後からついてゆくど、鏡台の前に空って花を食い始めた。突然ふりむいたが、かなしそうな顔をするので、気の毒になって、下へおりた。

翌日も花を買って帰ったがサヨがいないので、鏡台の部屋へいってみると、球根がひとつころがっていた。

待ったが彼女は帰って来ない。翌朝、近所の花屋へ問いあわしてみた。そ

従
軍
行
王
維

んな人は来ないという。ただいつのまにか、チューリップの花がみんな食われてしまった、といった。

あちこちの店で、チューリップが食べられるということを知るので、その度に花屋まで足をこんでみるが、だれのすることかわからず、花屋も腹をたてているようすがないので、さっぱりつかみどころのない話だった。その後、わたしも時々チューリップを食うが、べつにうまいとは思わない。サヨがどうしてこんなものを食うのが、そのたびに、いよいよわからなくなる。

1967.5.3

詩
鈔

原
田
憲
雄

角笛が鳴りひびく われらの出動だ

どよめいて われら 進撃開始

悲壮なラッパ 軍馬の嘶き、乱れ

金河の水を 争い渡る

日暮 沙漠のほとり

煙塵のうちに 戦いの声

李

李陵詠 時年十九

陵

名高き敵王の首級をあげ
帰国して天子の御前に報告するのだ

漢帝国の李陵將軍は

三代にわたる名將の家柄

おさないうころから奇略あり

少年にして軍人となった

辺境に出征 長駈して

深く匈奴の領地に攻め入った

軍旗をつらね敵にむかい

編鼓悲壮 やむことなし

沙漠に日の落ちるころ

なお砂塵まき 戦う声

傲慢不遜の蛮族どもを滅ぼしたか、ただけ

皇帝のご機嫌とそう気などなかった

だのに嫉まれ 援軍はや、て来なかった

かくて捕虜のはずかしめうけたのだ

出

燕支行一時征

幼いころからお目の御恩をいただきながら
坐してこれをお思えば堪えがたい
いつかはお報いしたいと心に深く思うゆえ
一氣に自決することもできないのだ
蘇武くんよ きみに会いたい
きみでなければ この思い 誰にわかつう

漢帝国の大將け俊才雄豪

参上し明光宮で皇帝に拜謁する

万衆の天子みずから車おし門前に見送られ

千人の官僚は五陵の東まで出て餞別した

「わたしは誓う 金馬門内に賜わった大邸宅をたちいで

王門間にゆき 身を長城となすことを

衛青 霍去病も一騎將たるにすぎぬ

朝廷は貳師將軍の功も物の数とされぬ

趙・魏 燕 韓 この武勇の地から剛卒つどい

關西の俠少年は 勇氣凜凜 雄たけびする

「隨に報いるには臥薪嘗胆あるのみと聞く

酒を飲みつつ骨をえぐって毒の矢を抜くもよし」

美々しい戦戈は白日に寒く

つらなる軍旗は黄壺に没する

陣太鼓はるかには瀚海の没ひるがえし

ひびくラッパしきりに天山の月をゆるがす

麒麟紋様の錦の帯に名刀吳鉤をひっさげて

タクをふむ騎 おどる栗毛

「剣ひきめさ匈奴のやつばらの腕たち切ろう」

「凱旋したら月支王の觥龍杯でいっしょに飲もう」

「漢兵が大いに叫べば 一卒 百将に当るのさ」

「蛮族の騎兵ども これをみて 哭いたり 悲しんだり ！」

戦斗には水火も辞せず道むこと 教えはするが

だが 知るがいい 最上の將軍は謀略によって勝つものなのだ

おもいぐさ

相思

紅豆は 南の国の生まれです

秋には幾枝ひらくことでしょう

あなた どっさり挿んでくださいわ

これこそわたしのこいなによ

友への手紙

贈祖三詠 濟州官
金作

蜘蛛はうつろな姿に巢をかけ
さりざりすが階段の前で鳴いている
日の暮 ひいやりした風がくる
きみはまたどうしておられるだスウか
がらんとした官舎に人の気配もなく
離れてこうしている気持はいいようもない
ひっそりした門は寂しくもう閉まって
夕日が秋草をよわよわ照らす
このあいだ使りがあつたけれど
千里の山河がふたりを隔てている
バキごろ汝・穎のくにぐにを旅し
去年は故郷にかえった由
交際しだして二十年
一日としてゆっくり話しあえたことがない
きみはひどい會乏と病氣にみまわれ
わたしも苦勞ばかりで暇がない
中秋には帰れぬかもしれないが

伯父さんに
送六舅歸陸渾

秋の暮れにはぜひ会いたい
ここで君とすごしたのは幾日ぐらいたったろう
ひねもす あのとまのことをおもっているのだ

伯父さんは淮・泗地方の役人で
卓茂や魯恭で之感嘆するほどだった
ゆうゆうとしてみずから人と競争せず
退職して東の水田を耕すという

師走には桑の枝かり
春風ふけば杏うえ

酒くんで「帰りなんいざ」をうたわれる
わかります。陶知事どののすばらしさ、

きみを南の港から送り出すとき涙がまるで糸の束
きみは東の国にゆきぼくを悲しませたものだった
お知らせしよう。むかしの友はやせこけちまい
いまじゃ洛陽にいたときと似ても似つかぬ

やせこけた
友より 送別

宰相閣下に

上張令公

あなたに筆たばさんで朱の階段をけき、
冠の玉さやがせ畏きあたりを上られる
廊下を歩み青鎖門より退下されると
方型の幌 絵模様の乗用車が待っている
市中では千金の文章を査閲され
朝廷では五色の詔書を開かれる
大君を補佐し 帝王の法典に光り輝き、
推薦せられた人材がぞくぞく都にやってくる
情理をつくす奏上に車駕も微行をおとどめになり
経典勅修委員会でも重要な役割をけたされる
かくて宮中の道化芝居もしいにやみ
また離宮や温泉への行幸も少なくなった
天子の血統が帝堯の後裔なることを中外に知らせ
王制は完璧となり 倉の礼典も矢止なほどだ
匈奴はけるかにわが皇威に服従し
中華の宰相の衣冠のおごぞかさ
文才 賈誼もいまや不遇をかこたす
諫争者 汲黯もしおのずから疎外に堪えやすい

祭

涼州喜神
州在涼州
唐時
明爲節

礼

漢

漢江臨汎

江

易經の「我に求めよ」の語に学び、あなたに求める
詩經を誦れば、「われを啓奏するもの」とおっしゃるでしょう
つねに閣下につき従うことができずならば
意に介しませぬ下僕のような世位であつても

涼州城外では通行の人はほとんどない
百尺峰のあたりに胡馬のあがる埃がみえる
わが軍の將兵が、太鼓うち、羌笛ふいて
いま祭るのは、城東の騎兵の神だ

楚のとりにては、三湘の地に接し
荆門山に、九つの支流が通じる
天地のなかに大江けながれ
有と無のなかに山の色
郡の大郡、前岸に浮かび
波瀾に遠く空が動揺する
哀陽の、よき風、よき日光が

山上の松
新泰郡松樹歌

山翁さまを引留めて酔っぱらわせろ

青青たる山上の松
数里みなかつたが いま また逢うた
きみを見めとき どんなに心に憶うたことか
きみにじがったこの心 きみならきつと識ってくれよう
きみのすがたが 気高くしつとりしているので
たかくたかく 雲間はるかに浮ぶみたいだ

劉くんに
送劉司直赴安西

地のはて 陽關の道
胡地の砂 辺塞の塵
春三月 時に雁とび
万里 旅人はまれだ
首登が天馬についてやってくる
葡萄は漢の使節を逐うてくる
いさや外圍けわが国を憎れている
しいて和親を求めることはいらぬのだ

春 景 色

奉和聖製從違兼
向興慶閣道中留
春雨中春望之作
應制

接輿^{せつい}どのまいる

朝川閑居贈裴秀
才迪

渭水は かつての秦の都城にまつわり 屈曲し
黃山は もとの漢の宮殿をめぐって 傾斜する
天子の輿^{こし}は はるかに仙宮の門の柳のあたりを出
歩道橋をめぐりけき 御苑の花を見たもうのだ
雲にそびえる帝^{みかど}の城 つがいの鳳凰をかかげた御門
雨のなかの春の樹々 万民のやすらかに住む家々
陽気の時にふさわしい政治をなされるためなのだ
季節のながめをたのしむ行幸ではけめめめない

寒ざむとした山は だんだん 蒼く

秋の川は 日びに さらさら

柴の戸のほとりで杖ついて

風にふかれ ひぐらしを聴く

渡し場にいるのは 落日ばかり

人すまめ里にたちのぼる ひとすじの煙

接輿^{せつい}さんが酔っぱらってまたやって来たら

五本の柳の木の前でいっしょに歌でもうたおうか

裴迪くんに
贈裴十迪

風景は朝夕よくなつてきた
さみにあげようと新しい詩をつくる
見るともなく遠い空をながめ
如意であごをささえていと
春風が草々をそよがせ

蘭や香りぐさがまがきのあたりに芽ぶき
ほこほこと日の光がへやをあたためる
お百姓さんがやってきて声をかける

にこにこと春が岡辺にかえつてきて
あわあわと水が堤にわいてます

桃や李^{すもも}げまだ咲かないが
こぶしの花が枝にいっぱい

崔興宗ク
ンノ肖像

崔興宗寫真詠

少年ノコロノ君ヲ插イテアゲタ
今デハ君ハ老イボレダガ
今トキ試リアツタ人タチデモ
ワカルダロ 昔ノ君ノハンサムガ

李太守を送る

送李太守赴上洛

商山は楚魯地方をつつみ
樹々の翠は茂ってしとり
駟路に滝のしぶきそそぎ

閨門に落ちる目かげのふかき

野の花は古い代のとりでにひらき

旅人の足音が人気ない林にひびく

板屋根に春の雨しとどおち

山のまちに昼はくもりはじめ

丹泉かうむころは鏡の地

白羽街道が荆山へむかう

西山のさやけさをごらんになれば

夏黄公・綺里季の心をしのべれようか

猿どののご帰国

送張五諍歸宣城

五湖までは千万里

ましてその五湖の西

漁港がある南陵郭だ

ほとくの家はそのさきの春穀溪

鳴りたかろうが 大江びようびよう

秋 夜 独 坐

秋夜獨坐懷內弟

崔興宗

ゆきつくまでに 秋草ざわざわ

前陵鎮では たぶんまた

猿が いっそう 啼くことだろう

夜はしんとして ざわめきやみ

つくつくほうしの 声のはるけさ

庭のえんじゅは北風にひびき

朝夕めっきり空の高い秋

たぶん君はちゃんと翼をととのえて

時さえくれば雲のように飛びたてるはず

わたしの生命はもはや白髪

年くれて自由な境涯を思うのだ

だが君の活躍すべき舞台はつい目の前

いながで隠居なんぞしておれようか

李 侯 君 に

送梓州李侯君

万壑の樹々 天に入り

千山に 杜鵑なく

山ひとつ 半ば雨ふり

頼川に帰る

歸頼川作

稍より高き泉ら

漢の女 綿布 みつぎ

巴の民の田をあらそうに

文翁^クよ 教えさとして

いにしえの人まなばしめ

谷口までくると入相の鐘が間遠に聞こえ

漁師や木こりの姿もほとんど見えなくなった

ゆっく^ク川 遠い山は暮れてゆき

ひと^ク川白雲にむかって帰るのだ

菱のつるはかよわく^クてしっ^クかりせぬし

やなぎの花は軽^クくて飛びさりやすい

東のおかの春草の色

なげ^クぎ^クつつ 柴の扉をと^クぎすのだ

銭起くんに

送銭少府還藍田

草の色は日々うつくしくなるが

桃源郷^クにひとけ^クめ^クったにけ^クめ

手に張衡の「帰田賦」をもち

行く人け

臨高臺送勢拾遺

「老菜の衣しを着にゆくきみをお送りする
毎年ヤマユスラウメの咲くのをまち
ときにはウミツバメといっしよに帰る
今年け寒食の節句の酒を
柴の戸に返ってやることができますね

きみ送るうと高台になつ
平原けるかに限りもしらぬ
日暮 飛ぶ鳥は還つてくるのに
行く人け 去りやまぬ

孫くんに

送孫二

郊外でたれを送るのか
学問に親しむあの人
「邵魯ノ客」のような書生
「洛陽ノ人」のようなキ子
寒々とした草原で別れのうたげ
わうぐれ 埃をあげて 車はたつ
山川のなんというさびしさ

裴迪くんの小台

登裴迪秀才小臺

作

ながめつくす涙にぬれるハンカチ

ここに坐っているとお外に出なくても

みわたすかぎり 雪と山

鳥とぶあたりには日は落ち

人里はずれて秋の野のしずけさ

たぶん遠いあの森ぎわからは

この軒間は見えもすまいけれど

月にさそわれてのお客もあるう

門番よかんぬきささずにおくがよい

裴母^かくん^がに

送裴母校書寮官

還江東

りっぱなご時世にながらく昇進せず
ほったらかされてゐるのは 君と同様
天命だ 怨めしそうなかおはすまい
ひとにはそれぞれ生き方がある
きみなら 衣を払って立ち去っても
四方八方いすれで窮することがあるう
秋のそらは 万里 静かで

日暮 大江は からりと澄み

清らかな夜 なんとゆうゆうと

月かげにきみは舟はたをたたくことだらう

水鳥のさわぐおたりに光なこみ

あわあわあかる警むら

役にもたため私が輝やく御代のお邪魔して

髻の毛も日ましによもぎのようになり

人事情係にはさっげりうとく

天子のお耳には遠すぎる

微賤の身では もっとしな意見でも

たれが公平に進達しよう

わたししゃ、ぱりここをたち去り

くくに帰、て百姓になるつもり

山 居

李處士山居 一 首

君子が天子のおそげにいっげい

小人けよろこんで御免こうむる

錬金術修行のあなたについて

林の上にそそりたつ山に住もう

待ちぼうけ
待備光教不至

箱を背にして木の花ひらき
雲間の樹立は 深く 浅く
しんとした昼をまだ寝ていると
まさにそのとき 山鳥が鳴く

門が 朝 あいたときから
立ったり坐ったり 車の音に耳傾けた
いまのけ^{おなだ}風玉のさやぐ音かと
戸を出て迎えにいこうとすると
暮の鐘 御死のあたりから鳴りはじめ
ばらばら雨が春の都をふりまざる
とうとう あなたは おいでにならぬ
空教に返って見たものの またがっかり

鄭どのに

鄭泉州相過

斜の日ざしが残春を照す二ス
やと晴れて並木の新緑や、
末几には鏡を置く仙人
林には畑に水をやる農夫

華か

子こ

崗かみ

孟めい

城じょう

幼わらわ

裴

迪

詩

鈔

一 朝川集一

五頭立ての馬車がこの辺鄙をお訪ねくだされた
ふたりの重儀にせかされて若いづれがお迎えする
台所では粗飯しか用意できませんが
命乏な阮家、どうぞお許しくだすって

庵を結ぶ 古城の下

時どき登る 古城の上

古城は昔のままではなく

現代の人が住ったり来たり

日が落ちて松風がふきだした

家に還ると草の露はきえていた

くつのもとに雲のかけがさして

山の翠がわたしの着物にさやさや

文
杏
館

斤
竹
額

鹿
柴

木
蘭
柴

はるばるたかい文杏館
日々なんどのほってけ
兩の嶺と北の湖
前にみてまたふりかえる

明ろい流れがうねったりまっ直なったり
緑の蔭がぎっしりとまたふかぶかと
ひとすじのこみち 山路にかよい
行きつつ歌い 見けるかす いにしへの峰

日ぐれ寒さむとした山を見て
わたしはひとり行ったのだ
深い林のことは知らないが
男鹿や女鹿の足あとがあった

蒼蒼と日の落ちるとき
鳥の聲にさわぐ谷水
谷ぞいの路は深まって

茶
葉
沱

宮
硯
陌

臨
湖
亭

南
瓦

この遊びいつおわるのか

ただよう香りには、じかみ乱れ

茶むらはまじる たかむらに

曇ってもまた日はさしてくるのだが

しんしんとやっぱり何やら寒いこと

門前の宮みや硯陌いんぼく

秋湖のほうへ行く道です

秋になると山には雨が多くって

落葉を掃く人がいないのです

窓のあたりがゆらゆらするとおもったら

狐独な月がさまよいはじめたところす

谷口でなく猿の聲

風にはこぼれてやってきました

小舟を風にまかせて泊めた

歌

柳

岸

湖

浪

瀬

湖水の岸の南^{みな}だつた
落日は岨^{せま}にくだり
清らの波が満ちてきた

からつとして湖水は広く
青くかがやき天の色と同じだ
舟とめて一言ながく歌^{うた}うたら
四方から涼しい風がやってくる

池に映って同じ色
吹く風に糸と散り
かけ結ぶ土地もある
陶淵明の家に劣らぬ

早瀬の声のさわぐなきさを
散歩して南の港にきてみると
ひらひらとわたる鷗^うら
時どき 私の方にやってくる

金きん

白はく

北きた

竹

屑くず

石いし

里

泉いずみ

灘なみ

堤つとみ

館

にわたすみか澄んで流れません
 金屑にかがやいて拾えそうです
 朝がきてまっ白の花が咲いたなら
 ひとりでいって汲みましょう

岩にのぼり水際にゆき
 波と遊べば退屈せぬが
 日がおちて川べは寒く
 浮き雲あわあわ色もなし

南山の北堤に
 結んだ庵は歌湖にのぞむ
 薪をとりにゆくととき いつも
 マコモやガマの間から小さな舟で

竹里館を訪ねてきて
 日にち道と親しんだ
 出入りするのけただ山鳥

辛え

表い

鳩お

漆と

園え

椒し

園え

ひっそりと人かげもなし

緑の境に春の草々き合えは
若殿さまも立ちどまりお摘みです
まして このこぶしの花は
蓮の花とまぎれるほどの容量です

ひっそりしたのが好きな性分
お約束やと果すことができました
きょう 漆園にやってきました
おおじさんご一緒で楽しいこと

赤いトゲが人の袖ひき
よい香りが客を留める

お料理のお役にたちますならば
どうぞあなた おつめください

歴代

多きかな
詩經商頌那

詩鈔

はしきかな 多きかな
 振り鼓 鼓 とり
 かんかんとつみうち
 祖壺 なぐさむ
 湯の孫 瘞かなで
 盃くんだり われもたのしも
 振り鼓 しずしすと
 笛のこえ さえざえと
 平らかに なごやかに
 響の音 ととのえり
 かがやける湯の孫
 うるわしきその声
 鉦 鼓 こえそろい
 文武の舞 にぎやかに
 賓客も来たまいて

悲

愁の
烏孫公主歌

團扇

の歌
晋桃葉

たのしがらすや

いにしえのみおや

世々のおや こそつくり

あさよいに うやまいて

まつりごと つつしみぎ

冬・秋の祭 みたまえ

湯の孫がささぐるものぞ

おやさまが わたしを嫁がせた 天のはて

遠い異国の烏孫の王に

天幕が部屋 毛氈が壁

たべものは肉 のみものは乳

しょっちゅう くへの思われて 心がいたむ

黄いろい鵲に身をなして ふるさとに帰りたや

七宝をちりばめたのうちわ

きらきらかがやく月

あなたといると涼しいこと

華

山
氏 名 氏
氏 名 氏

どうぞお忘れにならないで

やえやえと 竹林の竹で
白いうちわをつくりましよう
あなたのお手でゆすられて
風のたよりの来ますよう

うちわよ うちわよ

おまえでわたしは顔をかくす
やつれて化粧のしようなく
ごらんになるのがはずかしく

華山華蔵

わたしのためにあんたは死んだ
ひとりで生きててもしかたがない
かわいそうだと思つたら
棺桶あけて わたしのために

なやましく、たまらない

床に上って 帯といて
早風のうちらで首をつる

泣きあかす
涙に枕は浮きあがり
体は洗んで流される

泣きこがれ
涙は汗んに水時計
昼も夜も したたりやまめ

坐ってけ また 立って
日がくれて 夜がふけて
こんな時間に来るはずもない

わたしゃ松のつた
おまえが雪であつたなら
時どき訪ねてくれように

わたしゃにわとり
たれ知るまいが おまえ恋しゅうて
ひとり空むきないている

人去つて
清 趙仁叔

蝶が来て 風はたのしく
人去つて 月のわびしさ

なるな
清 無名氏

なるな 江の上の舟
なるな 江の上の月
舟がのせるのは人の別離
月がてらすのは人の離別

山居

過半直軒明達山
居 清 莫友芝

茅屋根のまわりは桑と竹
すけた籬よかきのあたりに 鶯 豚
客がきても椅子はつかわす
ともに坐る 千年の樹の根

袁 中 郎 集 雜 記

ちかごろ 周越然『書 書』(一九四四年原刊。一九六六年香港漢學圖書供應社校刊)を
読んだら「袁集版本考」という二ページの記事があった。読みおわって、かつて袁集について書
いた小さな原稿のことを思い出した。日付を入れていないが、一九五八年の七月か八月に書いた
ものだ、と思う。

袁宏道字 中郎の歿後、その弟の袁中道字 小簡によって『中郎先生全集』が編纂された。これが
果して上梓されたかどうかを知らぬが、全集のために書いた中道の序文によって、その趣旨をう
かがうことができる。

中郎先生はわかくして慧業を具え、弱冠にして進士となり、すなわち業ありて世に行わる。
……これより先 家に刻あれども精ならず、吳刻は精なれども備わらず。近時 刻する者い
よいよ多く、雜まじうるに狂言等の舊書を以てす。唐突恨むべし。……始めて家集の字櫛句比な
るを取り 稍まじやその少年未定の語を去り、年を按じ體を分ち、すべて一集となす。

中道が兄の全集を編纂したのは、一 既刊の家刻が精確でないこと、二 「吳本」すなわち袁
無涯(字は叔度)の刊行した本は 精確だけれども「瓶花齋集」等の教種にとどまり、なお未刻
の稿が少くないこと、三、公安派文学流行の風潮に投じ、完全な全集の刊行されないままに、中

郎香と称する舊書が横行すること、この三つの理由から、中郎集の定本を世に送らうとするところにあつたようである。

(民国三十五年印刷書録)

右に引いた序文は朱剣心選註『晚明小品文選』によつた。袁中道の集の「最全定本」と称する国学珍本文庫『兩雪齋近集』(民国二十四年滬東閣重刊)にはみえない。けれども中道の日記である『遊居柿録』(民国四十五年台北書局)の方歴四十二年(一六一四)九月に次の記事があり、その一部はさきに引用の序文の省略した部分とほとんど同じである。

袁無涯 別れをなさんとして、予の詩文を梓に入れんことを覓む。予いわく「まさ」に病を抱いて未だ料理する能わず」と。ただ中郎未刻の詩書をもつてこれに付し、且つその訂正を喩す。書坊中の狂言等は、ともに謔書に係る。これを見れば、呶かんと欲す。しかるに今みな集中に收む。殊に恨むべし。これを總じて中郎書すところの書は、始めに敝篋集あり、すなわち諸生 孝廉および初登第時の作となすなり。ついで錦帆集あり、吳門に令たりし作なり。ついで解脫集あり、吳門に宮を解き陶石簪諸公と吳越の諸山に遊びし作なり。ついで広陵集あり、吳令の政教を棄て、暫く妻子を攜えて儀真に寓居せし作なり。ついで瓶花集あり、則ち宗兆に授けられて太学となり儀曹に補せられし時の作となすなり。ついで瀟碧堂集あり、則ち六年柳浪湖に高臥せし作なり。則ち再び儀真(曹)に補せられし時の作なり。ついで華嵩遊草あり、則ち官は吏部典試、秦中往返の作なり。蓋し秦中より帰リしは明年庚戌たり。しかして先生逝けり。その存稿は一冊となすべく、中に奏疏教首あり。因、て衰集して無涯に付す。その他の選校の書は、宗鏡録のごとく、刪定六祖壇經のごとく、龍溪錄三大家詩文

のごとく 西方合論の、あるいはすでに刻し、あるいはなお家に並ぶるもののごとし。この外に余すなし。…無涯いわく「聞く、中郎先生なお性命を護ずるの書五十余巻ありと。知らず何こにありや」予いわく「いまだ見ることあらず。中郎先生の片紙隻字、みな一段の精光あり。想うに恐らく存せざらん。あに書の五十余巻に至って、その散佚を嘆くものあらんや。我と中郎と形影不離。たといこれあらんも、あに予が眼と諸開士とその兒子の眼を経ざらんや。中間 人に与えし書牘の筆にまかせて書き去り、一時稿を存せざるものはこれあらん。あるいは前後の意見の存せず相照応せざるを自覚して刪去せしものはこれあらん。遂に宛てて以て遺書ありとなす、いまだ可ならざるなり」無涯いわく「然り。先生もしこの書あらば、あに以て相授けずして帳中の秘となさんや」と。遂に別れ去る。

さて 中道の編んだ中郎集はまだ見ることができないので、断定はしえないが、「按年分体」というところからみて 作品はほぼ製作時順に排列するが 詩についていえば、樂府雜体 五古七古などの諸体に分つてあるように想像される。

袁中道の編について、明の鍾惺によって「鐘伯敬増定袁中郎全集」四十巻が刊行された。この本の編成は次の通りである。

冊	巻	内	容
1		序(雷思儒) 参関者氏籍	
2	目録		
1	序		

冊	巻	内	容
2		目録	
3			
4		引	
		伝	

7		6		5		4		3		2							
19	18	17	16	15	14	13	12	10	11	8	9	7	6	5			
啓書	談錄·文	目錄	碑記	雜錄	目錄	瓶史	編政 附酒評	壺談	玄莊	目錄	記述	目錄	記述(遊記)	目錄	疏文	策	奏疏·論

13		12		11		10		9		8		7					
33		32	31	30		29	28		27	26	25	23	24	21	22		20
七言絕句	目錄	七言絕句	五言絕句 附六言絕句	七言古詩	目錄	七言古詩	五言古詩 附六言古詩	目錄	五言樂府	擬古樂府 附雜體	尺牘	目錄	尺牘	目錄	尺牘	目錄	尺牘

	15		14		13
57		35		34	
		36			
五言律詩 附六言	目録	五言律詩	目録	五言律詩	

		16		15
	40	39		38
五言排律 附六言 七言	七言律詩	目録	七言律詩	

鏗惺の本は「増定」の名にそむかず、後に記す『梨雲館類定袁中郎全集』や、民国に入って刊行された、中国図書館や世界書局の袁中郎全集に漏れている論文を収めている。そのなかには中郎が亡妻李氏のために書いた「祭李安人文」「告李安人文」「李安人小祥文」など伝記研究には欠きえない貴重な文献をふくむ。

ただ、その編成が文体別で、各文体内では原則本刊行順に排列している。そこで同時に作った同題の連作が、たまたま文体を異にするために他巻に分載されたり、製作時からすれば全集中もっとも早い『漱篋集』所収の作品が、集の刊行がおくれたため、ずっと後の作品の間にわりこんだりして、やや錯雑した感を与える。

また詩の題を往々短縮し、そのため、読解の上でも、伝記研究上でも、貴重なものが失われる結果をきたしたように見うけられる。

これらの点からいえば、梨雲館本も、民国以後の全集も同様で、民国以後のものは、中道が舊書と断じた「狂言」を収め、「祭李安人文」等を欠き、かつ文字の誤りも多く、物足りない。

『梨雲館選定袁中郎全集』二十四卷。わたしは見っていない。京都深草の僧元政が訓点を加えて刊行した同題同巻の本の藍本であろうか。元政の本が原刻の体裁を忠実に襲っているものとすればその首巻のはじめの序によって、その刊行者は西湖の何偉然（字、欲仙）で、本の世に出たのは、その書かれた丁巳九日（月である）のすぐ後であろう。丁巳は万曆四十五年（一六一七）、中郎死後七年目に当る。

元政が中郎の名を知ったのは、徳川四代將軍家綱の万治二年（一六五九）亡命人陳元尊に初めて会ったときに、教えられたのである。知るとたちまち熱狂し鼓吹し、日本文壇における袁中郎流行の大きさがけとなった。元政の『岬山集』巻三の「陳元尊に与うる書」に「数日の前、市を探つて袁中郎集を得たり」の語が見える。元尊と相識して聞かないころのことであろう。そうしてその中郎集は梨雲館本だったのである。このことにまちがいがなければ、梨雲館本は、すでに日本に舶載されるほどに盛行していたことになる。万治二年は明の永明王の永曆十三年で、中郎の死後四十九年目に当る。次に表示するのは元政本の構成である。（元禄九年刊）

冊	1	2	3
卷			2
内	序 原序 目錄	目錄	擬古集存 附雜件 五言古上
容			

4	5	6	7
2	3	4	5
五言古下	七言古	五言排律	五言律上
			五言律下 附六言律

清の宣宗の道光九年（一八二九）秋、中郎の九世の姪孫である袁憲健が『梨雲館類定袁中郎先生全集』を刊行した。この本は、梨雲館本を重刻したものである。末尾の憲健の「重刻先大夫中郎公詩文全集序略」によると、憲健の父の袁潤のときすでに「筐中僅かに斯の集を存するのみ」であつたから、「その散軼して伝を失せんことを慮り、制例に付せんことを謀りしが、いまだ果さずして卒したるので、憲健がその遺志をついで重刻するのだ」といっている。

15	14	13		12	11	10		9	8	7	6	5	4	3	2	1
14	14	13	12	11	10	10	9	8	7	7	7	7	7	7	7	7
記述下	記述上	誌銘	碑	伝	序文下	序文上	七言絶	五言絶 附六言絶	七言律下	七言律上						

22	21	20	19	18	17			16		15
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	
尺牘	尺牘	尺牘	尺牘	雜録	恩諱	鶴政	瓶史	広莊	疏	

袁憲健の本は樂雲館本の重刻だけれども、同じく樂雲館本の翻刻である元政本とは、緒次に異同がある。

まず第一冊には、元政本にあった何偉然の序がなく、憲健の先輩知友六人の序と一人の跋をかかげ、ついで対校者氏名。そのつぎに全集の目録がある。

第二冊には元政本と同じ順序のせいで第一巻となり、巻頭に「袁中郎先生伝」をかかげる。伝は撰者の名をあらわさない。中國図書館本の巻頭に「公安縣志現代散文鈔」よりとつて引く「袁中郎伝」と、ごく小部分をのぞくほかは、同文である。伝のあとにすぐ「擬古樂府附雜傳」がつづく。その緒成は次のとおりである

冊	卷	内	答
6	6	五言律 <small>下</small>	附六言律
5	5	五言律 <small>上</small>	
4	4	五言排律	
3	3	七言古	
2	2	五言古	
1	1	伝 <small>擬古樂府 附雜傳</small>	
		序	
		跋	討校者氏名・目録

12	11	10	9	8	7
15	14	13	12	11	10
	政	記述	誌銘	碑記	伝
			存	七言絶	五言絶
					附六言絶
					七言律

13			12
20	19	18	16
暑諱	解政	瓶史	本莊 雜録

16		15		14
	24	23	22	21
敘	尺牘	尺牘	尺牘	尺牘

卷数に○をつけたものが元政本と異なる部分である。元政本では第二十卷の「雜録」が、ここでは「疏」のあとにきて第十六卷となり、「本莊」から「暑諱」までがそれぞれ一巻ずつ巻数がずれているのである。

何信然の序をばぶいて、中郎にはけがりの薄い人たちの序跋を加えた点をのぞけば、袁憲健本は元政本よりも合理的で親切だといつてよい。

中国図書館本「袁中郎全集」一冊は、民国二十四年（一九三五）七月二十日刊行された。編集責任者の名をあらわさない。

巻頭に「袁中郎伝」をかかげ、次いで原刻本文をのせる。本文は、詩集・文鈔・遊記・尺牘・隨筆の五部に大別する。詩集の編次は梨雲館本と同じ。他は次の通りである。

- 文鈔 伝記 序文 碑記 誌銘 疏・本莊
- 遊記 鍾惺本に「記述」とするもの
- 尺牘 梨雲館本と同じ

隨筆 雜錄 瓶史・鶴政・壺談・狂言

世界書局本『袁中郎全集』一冊は民国二十四年十一月発行された。中国図書館本の「袁中郎伝」と「原序」を除いて、蘇淵雷の語体序文を加え、總目を加え、細目を除き、大別の順を変えて、

文鈔 詩集 尺牘 隨筆・遊記・としただけの本で、見るべき特色がない。戦後、故種の袁中郎全集が出、そのたびに期待をしても、一本を購ったが、どうやら前記二種の活字本の装いをかえただけのものらしい。

このほかに目にふれたものに、四宜堂藏板『刻袁中郎先生十集』六冊がある。広荘 漱篋集、破研齋集、広陵集、桃源詠、筆冢遊草、瓶史、鶴政、狂言、狂言別集の十集を収め、その構成は次のとおり。

冊	書名	題	簽	序	目錄	校定者	卷	備	考
1	廣文 莊	無	無	無	有	周心齋	1		
2	破研齋集	袁中郎先生著	江盈科	有	徐弘 徐伯齡 (上) (下)	2			
3	廣文 莊	袁中郎先生著	朱一馮	無	有	郭嘉慶	3		
	廣文 莊	袁中郎先生著	無	有	有	郭嘉慶	1		

6	5			4	3
狂言別集	狂言	狂言	鶯政	瓶史	桃源詠
無	無	無	無	袁中郎先生著 瓶史 袁中郎先生著 水周氏家藏	袁中郎先生著 桃源詠 水周氏家藏
無	無	自序	無	無	曹澹仲(引) 番(跋)
有	無	有	有	有	有
夏柝胤 周亮工(1)	夏柝胤	夏柝胤	周亮工	王廷諫 洪邦基(1)	郝嘉慶
2	1	1	1	2	1
	卷二	卷一			
				1 卷尾に陳維儒の識あり	

明代刻本と思われるが、「狂言」と、他の全集にはみられない「狂言別集」をおさめる点で、信頼しにくいもののようなのである。しかし「散篋集」などは原刻本をそのまま写したもので、それなら他の全集ではわかからぬ原刻本の体裁をうかがいうる長所があるわけである。

以上 管見に入った袁中郎集の諸本について、説明を終った。感想を要約すると、今日にいたるまで、完全な袁中郎の全集はなかった、ということになる。

袁中郎は中国の文学史の上でも、思想史の上でも、かなり重要な人だと思ふ。一時代の思潮の形成者、主導者として、よりむしろ挫折者としてのその挫折の意義において、早晩、完全な全集の要望がおこるに違いない。新たに編まらるべき全集のために、二三の抜言をしておきたい。

一 中郎の著作だけでなく、その兄袁宗道とその弟袁中道の著作を合編し、『三袁全集』とす

るのがよい。「袁中郎全集」としても、兄弟の著作を附録することを、かれの場合、欠かすことができない。

二 宗鏡録などの結纂物も収載する。

三 原刻本の体裁け字跋をふくめ、規格に保存し、それを制作時順に（刊行順ではなく）排列する。

四 狂言などの書書も、参考として収載する。

五、中郎兄弟と交渉のあった人々の中郎兄弟にかかわる詩文は、できさるかぎり集めて附録する。

方 向 第 十 五 号 後 記

一九五三年三月、方向社をおこし、雑誌『方向』を創刊してから、あしかけ二十年、『方向』はようやく第十五号に達した。その歩みののろいことは、龜にもみみずにもおとらず、方向と称していても、同じ方向に鼻先がむいてゐるのなどうか、もよくわからぬ。同人ははじめ中新敬と原田憲雄の二人だったが、のちに原田憲雄と原田慶の二人が加わった。

歩みはいよいよのろく、方向はいよいよ不分明になるであらうが、死に向かつて重い足をこぶ旅人の、あるとき、ゆくりなくも、道をともにした、喜こびのかすかなしるしにはなりうるであらうか。このような勝手きまま、雑誌を支持してくださる読者諸賢に深く感謝する。（憲）

方 向

守
返

(40冊の内 32)

1972年10月13日

発行所

方 向 社

(〒602) 京都市上京区下長者町通千本西入

福島町・妙徳寺内

電話：京都(075)463 6967 × 振替：京都7232

*